

ミヒャエル・エンデ著,
「ジム・クノップフと荒くれ13」のマンダラ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 良孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000402

ミヒャエル・エンデ著

「ジム・クノッフと荒くれ13」のマンダラ

小林良孝

第1章 序

1983年に初版が出版された M. Ende の最初の出世作 »Jim Knopf und die Wilde 13« の中には、国名としての「マンダラ」(Mandala)、及びこの国名の形容詞「マンダラの」(mandalanisch) という語がきわめて多く用いられている。例をあげれば次の通りである。

第1章の中には、

しかし今回は、彼女はジムのためにいとも美しいマンダラの絵の工具箱を持ってきていた⁽¹⁾。

第2章の中には、

以前には時々郵便船が来るだけだったけれども、我々がマンダラと外交関係を持って以来、ここでの船の往来は非常に頻繁になったのである。ほとんど毎月のように、マンダラの皇帝にして我が尊敬する友プング・ギングの大型御用船がやって来ているのである⁽²⁾。

第3章の中には、

「もし偶然にもマンダラの方へいらっしゃるのでしたら、ジムとルーカスとリ・シをも一緒に連れて行っていただけないかしら。」と、ヴァース婦人はたずねた⁽³⁾。

第4章の中には、

「そうじゃないんだよ、小さなお嬢さん。私たちは今、遠いマンダラのそのまた先へ旅している途中なんだよ。」と、ルーカスはニヤニヤ笑いながら答えた⁽⁴⁾。

第10章の中には、

そう、その当時彼は、マンダラでのサーカスの興行のとき、この出し物で

おおいに人気を博したのであった⁽⁵⁾。

第12章の中には、

「あれはマンダラだよ！」と、ジムは上体を起して言った。……まるでおもちゃのように小さかったけれども、マンダラの首都ピングが彼らの眼下をスーッと過ぎ去っていった⁽⁶⁾。

第16章の中には、

それから、いくつもの丘の上をまるで赤いひものように長々と続いているマンダラの長城がはっきり見えてきた。そのむこうには、畑や街路や川や太鼓橋などのあるマンダラの国が広がっていた⁽⁷⁾。

第20章の中には、

「今日は、私の尊敬する友人にして、私の娘の命の恩人さん！」マンダラの皇帝のよくひびく声が聞えてきた。「あなたとあなたの小さい友人のジムに、重要なそして嬉しいお知らせがあるのです。」⁽⁸⁾

第21章の中には、

夕ご飯の後、ジムとリ・シは宮殿の中を散歩して、長い巻き毛のおとなしい紫水牛に餌をやったり、ひふが水のしたたる月光のようにキラキラひかっているマンダラの一角獣に餌をやったりした⁽⁹⁾。

第25章の中には、

ようやく出発の準備が全部ととのった時、ジムの前に1人の海賊が進み出てきて告げた。「これでおれたちは準備ができやしたぜ。どっちへ行けばいいんですかい？」

「マンダラへ。」とジムが言った⁽¹⁰⁾。

第26章の中には、

ピング・ポングはただちに、帆であれ櫂であれ、その類のものを備えているものなら何であれ、つまりマンダラの船という船を全部かき集めて、遭難した水夫たちや、できれば「荒くれ13」に捕えられた水夫たちを、捜索するために出航する指図をしたのであった⁽¹¹⁾。

第27章の中には、

「いいえ、それは『絶対に開かない』錠で、昔々マンダラの名工が作ったものなのです。」と、皇帝は真剣に答えた⁽¹²⁾。

第29章の中には、

マンダラからそこへ行くには、国の御用船でさえ何日もかかっていたのである⁽¹³⁾。

そして、第 30 章に当る最終章には、

その 2 人の御子が花婿・花嫁の衣装を着せてもらい終ると、マンダラの皇帝はその広い広場を 2 人の方へシズシズとあゆんで行った⁽¹⁴⁾。

以上のように、エンデのこの作品の中には、「マンダラ」および「マンダラの」という言葉が、最初の章から最後の章に至るまで、ほとんど全章にわたって満遍なく語られているのである。当然のことながら、エンデのこの言葉は、はたして本来の仏教用語としてのマンダラ（曼荼羅）と何か関係があるのであろうかという疑問・興味にかられる。

本来、マンダラ（サンスクリットの mandala）という語は、「本質保持」、「神髓具足」、あるいは「本質成就」という意味を持ち、紀元後 600 年代以降インドで興ったタントラ仏教において、その教義の神髓を表わす語として用いられ始めたものである。タントラ仏教は、間をおかずチベットへ伝えられ、今日のラマ教として今日に至っている。チベットへ伝えられたタントラ仏教は、更に中国へ伝えられて中国密教となった。その中国密教は、806 年（延暦 25 年）空海によって日本へ請来されて、真言宗として今日に至っているのである。これらのタントリズム系の仏教においては、マンダラは祭壇として築かれ、あるいは寺院の壁画として描かれ、あるいは図絵として描かれて本堂に掛けられ、修法の際に用いられているものである。804 年に入唐した空海は、805 年に密教の第 7 祖恵果を青竜寺に訪ねた。来訪を受けた恵果は、初対面の空海にたて続けに金剛界と胎蔵界の伝法灌頂を授け、806 年の帰国に際しては数々の密教の法具を付託したのである。こうして空海が日本へ請来した密教法具の中には、金剛界曼荼羅と胎蔵曼荼羅のいわゆる両界曼荼羅があった。筆者がマンダラという言葉で思い出すのは、この密教法具としての曼荼羅図絵なのである。

曼荼羅にもいろいろ種類があるが、その一つに、^{とえ}都会曼荼羅と別尊曼荼羅に分ける分け方がある。都会曼荼羅というのは、胎蔵曼荼羅や金剛界曼荼羅などがこれの代表的なものであるが、摩訶毘盧遮那如来すなわち大日如来を中心に置いて、その眷族全尊を集めて描いたものである。他方、別尊曼荼羅というのは、釈迦如来とか薬師如来とか大元帥明王などの一尊を中心に置いて、その尊特有の徳を描いたものである。

エンデの「ジム・クノップと荒くれ 13」を初めて通読した時、この物語の中で「マンダラ」という言葉が頻繁に使用されていることに、まず驚かされた。この「マンダラ」という言葉は、仏教用語としての本来の曼荼羅の意味をふまえた上で使用されているのであろうか。もしそうだとしたらその言葉の正しい

理解の上で使用されているのであろうか。あるいは、単なるエキゾチックな言葉遊びに過ぎないのであろうか。この疑問が本稿の発端であり、この疑問に答を出すことが本稿の課題である。

結論を先取りして言えば、エンデのこの物語の中の「マングラ」および「マングラの」という言葉は、単なる言葉遊びではない。またその意味をはき違えて使用しているのでもない、「ジム・クノップと荒くれ13」の構造は、おおまかに言えば胎蔵曼荼羅の構造ときわめてよく似ていると言えるのである。勿論、「ジム・クノップと荒くれ13」は、キリスト教王国の隆盛を語ったものであり、胎蔵曼荼羅は仏教王国の隆盛を表現したものであるから、性格面での根本的な相違もあるし、最終目的の達成（これは曼荼羅図で言えば最外院すなわち外金剛部院）に至るまでの過程の設定の仕方においては粗密の差はある。しかしこの両者は、構造の点ではよく似ているのである。この構造的な類似性を、「ジム・クノップと荒くれ13」を本稿でマングラ図化することによって明らかにすることにしよう。

「ジム・クノップと荒くれ13」をマングラ図化する作業に入る前に、その模範・基準となる胎蔵曼荼羅の構造を確認しておかなければならない⁽¹⁵⁾。

胎蔵曼荼羅は12の院に分けられ、この12院はそのはたす機能によって4種類に分けられている。中台八葉院、初重の院、第二重の院、第三重の院の4種類である。

中心にある一つの院が中台八葉院である。この院の中核には、この曼荼羅全体の主尊である自性法身・大悲大日如来が置かれている。大日如来の法界体性智は宝幢如来の大円鏡智、天鼓雷音如来の成所作智、無量寿如来の妙観察智、開敷華王如来の平等性智の四智に特異化されて開示されている。そして、大日如来の初重、第二重、第三重への自己展開エネルギーは、行を象徴する普賢、弥勒、観自在、文殊の四菩薩によって開示されている。要するに、中台八葉院は、大日如来が本来具有している大悲、四智、行動力を最も元始的な形で、1体構造で総合的に開示したものである。

この外側の初重と二重を構成している10個の院は、衆生済度を実現するための方便を、細分化と再統合の2種類の方便に分けて究竟したものである。

まず、中台八葉院を四方向からとり囲んで初重を構成している遍知院、蓮華部院、持明院、金剛手院の四つの院は、中台八葉院の中の法界体性智を四如来の四智に細分化した上で、更に1段階だけ最外院の側へ降ろしたものである。と同時に、大日如来の心の根本である大悲心を悲心と慈心に分けて、蓮華部院

の諸尊によって悲心（抜苦）を究竟し、金剛手院の諸尊によって慈心（与楽）を究竟したものである。つまり初重のこれら四つの院は、大日如来の法界体性智（菩提心）と大悲心を衆生に伝えるため、細分化の方法によって方便を究竟したものである。

これに対して初重をとり囲んでいる第二重の六つの院は、すなわち釈迦院・文殊院、地藏院、虚空蔵院・蘇悉地院、除蓋障院は、初重の院で細分化された大日如来の法界体性智（菩提心）と大悲心を再統合して大日如来の一切智智を、すなわち大日如来の悟りを本来の姿にもどすための院なのである。但し、ただ再統合するだけではない、重要なことは衆生に直接理解可能な姿で再統合することなのである。つまりこの第二重の院は、統合によって方便を究竟するための院なのである。初重と第二重の院で活躍している諸尊は、方便を究竟するために出現した中尊大日如来の変化法身である。

第二重の院を四方からぐるりと取り囲んでいるどこにも仕切り線のない院、但し四方に門はあるけれども一体構造になっている一番外側の院が第三重の院である。この院は最外院とも外金剛部院とも呼ばれている。この院は、「大日経」の『入真言門住信品第一の七』で説かれている大日如来のことば「菩提心を因と為し、大悲心を根本と為し、方便を究竟す」ることによって済度された衆生の世界である。大日如来によって等流法身として生まれかわった衆生の住まう世界である。この院は、現実世界における仏国土であり、この院の建立と拡大こそが中尊大日如来の本誓だったのである。

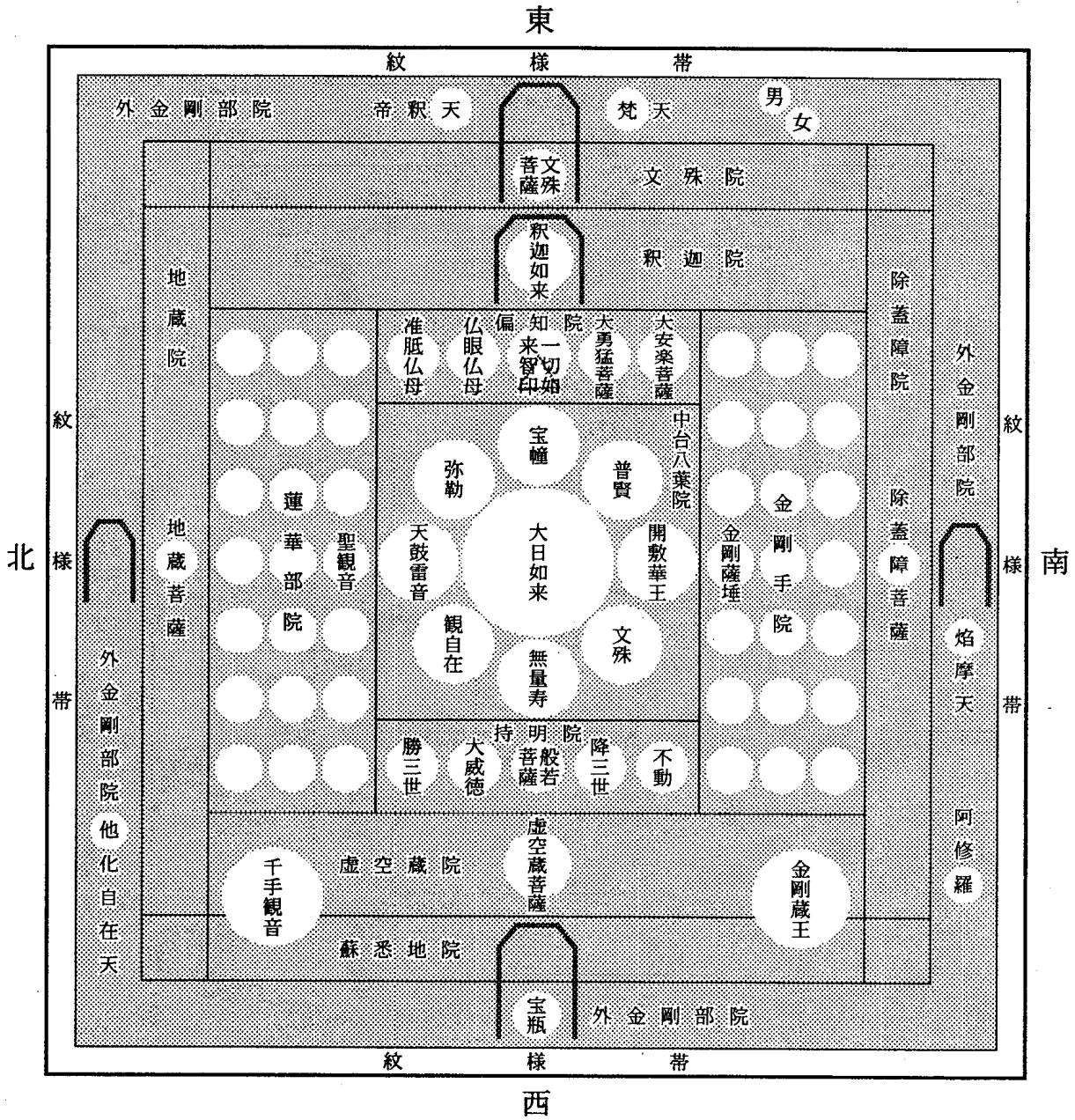
胎蔵マンダラは、以上の12の院によって構成され、結界されている。しかし、閉鎖はされていない。最外院の西門は、マンダラの外の世界に通じている門なのである。この門の中には、最外院の主尊である法瓶が配置されている。法瓶は仏法そのものである。この門は、以前には仏法と無縁であった者が、縁あって仏法に済度され、等流法身に変身して仏法の世界に入る時、通る法門なのである。この門は仏教を守護する最強の龍王である難陀龍王と烏波難陀龍王によって守護され、更に不可越を意味する対面天と難波天によって固く守護されている。仏法に縁なき衆生は、この門を通ることは不可能なのである。

第1図 胎藏曼陀羅 (元禄本)



石田尚豊著「両界曼陀羅の知慧」(東京美術)

第2図 胎藏曼陀羅略図



第2章 「ジム・クノップと荒くれ13」のマンダラ図

2-1 本尊と中台院の構造

「ジム・クノップと荒くれ13」をマンダラ図で表わす作業を始めるに当たってまず本尊は何か、本尊のいる中台院はどのような構造になるのか、これを決定する作業から始めなければならない。つまり、この物語の中からこのマンダラ全体の本尊を探し出さなければならないのである。

ここで一つ断っておかなければならない。「ジム・クノップと荒くれ13」は、ミステリック・ファンタジーなのである。本尊はなにかということはマンダラ図においては最も大切な問題で、まずこれが確定できないことにはマンダラ図作製の緒にさえつくことができないのである。ところが、この本尊となるべき尊格は、この物語においても最大の黒幕で、大団円を迎えるまでその姿を現さないのである。従って、この物語の筋に従って本尊を探して行く場合、迷走せざるを得ないのである。

では迷走を始めることにしよう。

この物語の始まりは、雨の日、ルマー国のヴァース婦人の小さな店の中。ジムとリ・シがヴァース婦人の台所の食卓に座って、ヴァース婦人にわくわくするような物語を読んでもらっている。そこへ仕事を終わったルーカスが入ってくる。

„Guten Tag, Lukas!“ sagte Jim und strahlte.

„Guten Tag, *Kollege*!“ antwortete Lukas⁽¹⁶⁾.

「今日は、ルーカス！」と言ってジムは顔を輝かせた。

「今日は、*同僚*！」と、ルーカスは答えた。

ここで原文を引用したのは理由がある。ジムに対する呼びかけの言葉 *Kollege* がイタリックになっているのである。これは尋常でない。エンデは、何かサインを出している。そのサインの意味はまだわからない。ともかく、ジムもルーカスも蒸気機関車の運転手なのである。ルーカスを交えて話がはずむ。

「ずっと前から聞こうと思っていたんだがね、リ・シ。」ルーカスはゆったりとパイプに火をつけてから話し始めた。「あの竜マルツァーンは今いったいどんな具合になってるかね？」

「彼はまだぐっすり眠り続けているわ。」小さな姫は小鳥の声のようなかわいらしい声で答えた。「でもとっても不思議に見えるの。純金でできてい

るみたいに、頭からしっぽの先までキラキラ輝いているのよ。お父様は、彼の魔法の眠りがなにもものにもさまたげられることのないように、昼も夜も番人をつけて見張らせているわ。お父様は、竜が目を覚ましはじめたら、すぐ報告するように命令してあるの。」

「それはすばらしい。」ルーカスは言った。「もう長くはかからないはずだ。1年たてばまた目を覚ますって、あの竜は言っていたからなあ。」

「私たちの『博学の華』の計算によれば、その偉大な瞬間は、3週間と1日後に来るはずよ。」リ・シは答えた。

「そうしたら僕まっ先に聞くんだ。」ジムははっきりと言った。「あの13人の海賊は、僕をどこからさらってきたのか、そして、僕は本当は誰なのか。」⁽¹⁷⁾

ここで登場したのは、「マールツァーン」という名の竜。黄金でできているみたいにキラキラ輝いて見える？ 1年間の魔法の眠りについてはいる最中？ これはただものではなさそう。それより気になるのはジムの言葉だ。13人の海賊？ さらわれて来た？ 「僕は本当は誰なのか？」これは捨ておけない。これがこの物語の核心であろう。それにこの物語の表題は「ジム・クノップと荒くれ13」だ。ジムは、表題の先頭に出てくる人物である。それに著者エンデ自身、イタリックで何かのサインを出してはいたではないか。マンダラの本尊を占めるのはジムかもしれない。ジムを追え！ ジムを洗え！

事の発端はその日の夜にやってくる。悪天候の暗闇のため、郵便船がルマー国と新ルマー国の国境に衝突する事故が起きたのだ。ルマー国王アルフォンス12時15分前王は、国民を召集して、国民にこのような事故の再発防止策を諮問する。国民と言っても、ジム、ルーカス、ヴァース婦人そして物知り自慢のエルメル氏くらいのものである。灯台を建てては、という意見が出されるが、ルマー国にしても新ルマー国にしても小島の国で、高い灯台を建てる土地さえない。そのため、この話は行き詰まる。その時、ジムが言う。

「わかった！」ジムが突然言った。……

「……できないかな、ほら。」ジムは興奮して早口で言った。「トゥア・トゥアさんをルマーへ連れてきて、灯台の役をしてもらうことはできないだろうか。あの人ならほんの少ししか場所をとらないよ。しかし、遠くからはまるで高い塔のように見えるんだよ。あの人ランプを持って高い山の上に立っていれば、ずーっと遠くからでもよく見えるにちがいないよ。彼のために小さい家を建ててやれば、新ルマー国に住むことができるだろうし。

そうすれば彼だって寂しくはなくなるだろう。」

一瞬、皆は啞然として口もきけなかった。それからルーカスが言った。

「ジム、なあ若いの、それはほんとうにすばらしい思いつきだよ！」

「いやいやそれどころではありません。」エルメル氏は人さし指を立てて言った。

「それはもう天才的というものです。」⁽¹⁸⁾

これが正にジムの本領である。ジムは天才的な頭脳の持ち主なのである。次から次へと襲ってくる難局を打開する糸口は、常にジムの知恵によって見出されるのである。さし当たり、ジムを「知恵の人」と定義しておこう。

こうしてトゥア・トゥアさんを迎えに行くことになったわけであるが、彼の居場所は尋常な所ではない。広い広い海の向こうの大陸、その大陸の内陸部に広がる「世界のはて」砂漠⁽¹⁹⁾の中のどこかのオアシスのほとりに居るはずなのである。しかもこの大陸に入るには、いきなり「世界の冠」山脈⁽²⁰⁾を越えなければならない。なんとなく古代ギリシアの神話伝説「アルゴ船」の冒険談やホメロスの「オデュッセイア」などを思い出させる。ジムとルーカスは、海越え、山越え、砂漠越えのこの旅を、蒸気機関車エマに乗って出かけることにする。ジムの子供機関車モリーをもつれて行くことにする。

「では、いつ出発しようか？」とジムが訪ねた。

ルーカスは注意深く空を見あげた。……

「今夜は晴れるなあ、風ももってこいだ。強すぎもせず、弱すぎもせず。これを利用しない手はない。今晚さっそく船を出すべきだよ。君もそれでいいかい。」ルーカスはこの道のプロらしくきっぱりと言った。

「いいとも、ルーカス。」ジムが言った⁽²¹⁾。

ルーカスは常にジムと行動を共にする。ジムの考えを行動に移すのはルーカスである。そして敵とのたちまわりに当っては、ルーカスは常に金剛力士のように敵に立ち向い、命を張ってジムを庇護する人なのである。ルーカスは行動の人である。さし当り、ルーカスを「行動の人」と定義しておこう。

ジムの本領は明らかになった。ルーカスの本領も明らかになった。しかし、ジムの素性、ジムの生れはまだわからない。

ジムの身の上について最初に語られるのは、この物語全 30 章のうち第 19 章においてである。

「郵便を 1 通配達に来ました。」郵便屋さんが言った。「この手紙にもまたもや、ジムが入っていたあの小包に書いてあった宛名と同じように、妙ち

きりんな宛名が書いてあるのです。それで私は考えたのです。この手紙もヴァースさんの所に配達するのが一番よかろうと。』⁽²²⁾

つまりジムはヴァース婦人の実子ではないのだ。とりあえずヴァース婦人の所に配達されてきた宛名不詳の小包の中から出てきた子供だったというのだ。この妙ないきさつが解き明かされるのは第24章においてである。そのためには23章の要約から始めなければならない。ジムの宿敵であった竜マールツァーンは、1年間の魔法の眠りを経て、最も忠実な家臣「知恵の黄金竜」⁽²³⁾への変身をとげる。この「知恵の黄金竜」は、2000年の歴史の生き証人であり、全知にして完全な予知能力さえそなえている。この竜の助言を得て、ジムとルーカスは、マンダラ国王プング・ギングに御用立ててもらった戦艦に乗って、難敵である海賊「荒くれ13」に決戦をいどむ。しかし完全に惨敗。ルーカスもリ・シ姫も船長も水夫たちも縛りあげられ、海賊船の船底の倉庫の中にたたき込まれ、ジム達の船は爆破されてしまう。偶然に命びろいし、「荒くれ13」の手中に落ちていないのは、ジムとマンダラ国の僧長ピング・ポングだけ。ピング・ポングは桶に乗って漂流し、祖国マンダラ国にたどりつく。ジムは命からがら海賊船の帆柱のてっぺんにしがみついて帆陰に身を隠し、「あつてはならない国」⁽²⁴⁾の中にある「荒くれ13」の根城「嵐の目」⁽²⁵⁾城に潜入する。「荒くれ13」たちは、にぎやかに戦勝祝賀の酒宴に興じている。ジムはそのすぐそばに身を潜めて、彼らの挙動をうかがい、聞き耳を立てている。——聞こえてくる。

「なあ兄弟たちよ、おめえらあのちびのあまを知っているような気はしねえか。おらあ、あの子をいつかどこかで見たことがあるような気がするんだがなあ。」1人がブツブツ言った。

「兄弟、おれたちはなあ、ああいう類のやつらは、もううんとこさつかまえたんだぜ。だから、勘違いということもあるさ。」他の1人が言った。

「そうともよ、おれたちはあのようながきどもは、もううんとこさあの竜に売り渡してきたんだぜ。」3番目の男が言った。

「それと交換に焼酎を受け取ってきたじゃねえか。たった1回だけは別にしてはなあ。なあ兄弟たち、あの小さい黒いがきのことよ。あのがき、タールをぬったイグサのかごに入れられて、波間にプカプカ漂っていたっけなあ。おれたちはあのがきをひろいあげてやったよなあ。あれはひでえ嵐の後だったっけなあ。」4人目の男が言った。

ジムは、また体がピクッとひきつった。彼らは僕のことを言っているのではなかろうか。それは自分だったかもしれない——確かにそうだ！ ジム

は息をこらして聞き耳を立てていた。

「そばには冠がそえてあった。金の筒の中には羊皮紙の書き物がくるくる巻いて入れてあった。あれはいったいどういうがきだったのだろう。おらあ、知りたいんだ。」海賊たちは急にシーンと静かになって、ぼんやりと前を見つめた。その男は言葉を続けた。「あの書きものにはとんでもねえことが書いてあったよなあ兄弟、まだ覚えているだろう。この子に悪さをする奴は、この子によって力を取り上げられ、縛りあげられるだろう。なぜならこの子は、曲がっていることをまっすぐにするだろうから、とか何とかよ。あれはいったいどういう意味なんだろうなあ、おらあ知りてえもんだ。」

「ばっかげたことよ。それは何もかも、おめえらはどいつもこいつも、しみつたれたアルファベット1つしか知らねえため、まともに読めねえためじゃねえか。あれは全然そんなことを言っていたのじゃなかったのさ。」おかしらが、いまいましそうにがなりたてた。

「おめえだって利口ではねえくせしやがって。」1人が口をはさんだ。

「だまれ！」おかしらがどなりつけてジョッキを床にたたきつけた。「さからう気か。おれたちやあのがきを海から拾い上げてやったんだぜ。おれたちがいなかったら、あのがきは確実に溺れて死んでしまったんだ。だからおれたちや、あのがきにいいことをしてやったじゃねえか。」

「でもよお、あのがきを小包にして竜のところへ送ったよなあ、自分で連れて行く時間がなかったからなあ。」

「じゃおめえ、あのがきをホイホイあまやかして育てるべきだったとでも言う気かよ。おめえら、全くバカだよ。あのがきが竜の所に届いていれば、万事それでオッケーよ。あのがき、絶対にあそこから逃げ出せっこねえんだから。」第3番目の男が言った。

「そうよそうよ、あれでオッケーよ。でもなあ兄弟、あのがきは竜のところには届いていなかったんだぜ。おめえらも知っているだろう、おれたちが焼酎を受け取ろうとした時のあいつの怒りようだったらなかったぜ。」4番目の男が言った⁽²⁶⁾。

頼みもしないのに、よくも言ってくれたものだ。ジムについて海賊たちが知っているのはこれですべてだ。タールをぬったイグサのかごの中に入れて大嵐の後の海を漂流していた？ そばには王冠と羊皮紙の文書がそえてあった？ これは初耳だ。ジムの身の上についてこれ以上のことを解き明かすには、その

王冠と文書を探し出すしかない。もし捨ててなければそれは彼ら海賊たちがどこかに置いておいたはずである。ジムはそのまま身を潜めて、ルーカス、リ・シ姫、その他の仲間たちの救出のヒントとチャンスを窺っている。この場に直面して、ジムの頭の中にはあの「知恵の黄金竜」の予言したことなどみじんもない。現実の事態の進展の中で無我夢中自己の最善をつくしているだけなのだ。けれども、後から見れば、事はすべてあの「知恵の黄金竜」の予言した通りに進んでいくのである。

話の筋を追うことにしよう。「荒くれ13」は、同時に生れた13人の兄弟だという。能力も性格も皆同じ、外見上も見分けがつかない。おかしらの役は、交代で勤める。そのおかしらのしるしは、海賊帽にしつけ針でとめてある赤い五つの尖のある星である。ジムは、偶然のふとしたはずみを利用して、おかしらの海賊帽からこの五つの尖のある星をおかしらの帽子から取りはずして手に入れてしまう。そのため、誰がおかしらなのかわからなくなってしまった「荒くれ13」は、たちまち同志討ちを始め、ついには全員気絶してしまふ。ジムはその気絶している「荒くれ13」を1人1人縛りあげ、それからようやくルーカス、リ・シ姫、マンガラ国の船長、その他の水夫たちを無事救出する。皆で「嵐の目」城を搜索して、「荒くれ13」の宝物庫を発見する。はたせるかなそこに例のタールをぬったイグサのかごを発見する。その中には王冠、王笏、十字架つき宝珠、それに金の筒入りの羊皮紙の文書も！ その羊皮紙の文書には次のように書いてあったのだ。

この幼子を発見するであろう未知の御方に 告

この幼子を救い、愛と忠誠をもって迎え入れる者には、この幼子はいつの日か王者の慈愛をもって報いるであろう。

しかし、この幼子に悪をなす者からはすべての権力と強さを奪い取り、縛って裁くであろう。何故ならば、この幼子によって曲っていることがまっすぐになるからである。

この幼子の出生の秘密は次の通りである。3人の聖にして賢明なる王が幼児キリストに贈物を捧げるために、幼児キリストの所へやってきた。この3人の王の1人の顔は黒かった。その名はカスパーであった。

この黒い顔の王の廣大にしてみごとな国は、いつの日にかなくなっ

てしまい、発見されることはなかった。以後、カスパー王の子孫はこの失われた王国を探し求め、地球のつづうらうらを、陸も海も、さすらい続けてきたのである。

その失われた故郷の王国の名はヤンバラなり

それ以来、32代すぎ去った。そしてその最後の32代目の者である我々もまた、このメッセージが読まれる頃には、船もろとも海に沈んでしまっているであろう。なぜなら、この嵐が我々を飲み込むからである。

この子は綿々と続いてきた聖三王カスパーの33代目の末裔である。この子には、ヤンバラを再発見することが約束されているのである。それ故、我々は天のおぼしめしによってこの幼子が救われますように、この子をイグサのかごに入れて海に流すことにした。我々はこの幼子を神の御手にゆだねる。それ故、この幼子の名は次の通りなれ

ミュレン王子

ルーカスがこのメッセージを読み上げている間じゅう、ジムの目は大きく真剣なまなざしになっていた。ジムの胸は高鳴り、その荘厳な王冠を手にとってまじまじと見つめていた。他の者たちは黙ったままだった。それはおごそかな瞬間だった。

ルーカスは小さな友ジムにうなづいて見せて、そして小声で言った。

「かぶりなさい、これはおまえのものだ。」

そこでジムは、そのキラキラ輝く王冠を黒い巻き毛の頭の上に載せた。

船長と水夫たちは帽子をぬいで、深々と身をかがめ、ささやいた。「おめでとうございます。王子様！」そして船長は大声で言った。

「ミュレン王子、万歳！ 万歳！ 万歳！」⁽²⁷⁾

ついにこれでジム・クノッフの身元は割れた。本名はミュレン、聖三王の1人カスパーの33代目の末裔、王子だったのである。ジムは、カスパー王の失われた王国を再発見することを天命として付託されてこの世に送りこまれた少年だったのである。

こうして長々と徹底的にジムの身元を追求してきたのは、とりもなおさず、ジムこそマンガラの中台院の本尊の座を占めるべき人物ではなかろうか、と見当をつけていたからに他ならない。しかし、この見当はここまできて最後の最後になって、ものの見事に的はずれであったことが判明した。ジムはカスパー

王の末裔であり、カスパー王の悲願を付託されてこの世に送り出された者、つまり本尊ではないのだ。本尊はジムに本願を付託したカスパー王でなければならない。それ故、このマンダラを理解するためには、このマンダラの本尊カスパー王を知らなければならない。しかし、エンデのこの作品の中には、この目的に役立つようなことはどこにも言及されていない。これは、誰もが知っているはずの常識であり、前提なのである。エンデは聖書を踏まえてこの物語を作っているに違いないのである。それ故、マンダラの性格をはっきりさせるためには、聖書に拠って明確な言葉でカスパー王を定義しておかなければならない。

イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

『ユダの地、ベツレヘムよ、

お前はユダの指導者たちの中で
決していちばん小さいものではない。

お前から指導者が現れ、

わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』

そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。』⁽²⁸⁾

この「占星術の学者たち」の内の1人がカスパーである。カスパーは世界中の誰よりも先にイエス・キリストの誕生を知った人である。すなわち、「カスパーは知恵の人である。」と定義することができる。

また、カスパーは世界で誰よりも先にイエス・キリストをはるばる東方から

訪ねて来て、世界で誰よりも先にイエス・キリストを礼拝した人である。すなわち、「カスパーは行動の人である。」と定義することも出来る。そして、彼の行動の因は敬虔である。

これによって、今描こうとしているマンダラの全体の性格が決定される。胎蔵マンダラを決定している「菩提心を因と為し、大悲を根本と為し、方便を究竟と為す。」⁽²⁹⁾ にならって筆者の言葉で表現すれば、カスパーは「敬虔を因となし、愛を根本となし、方便を究竟となす。」ということになる。方便の究竟は、この後、初重と第二重で展開され明確になる。

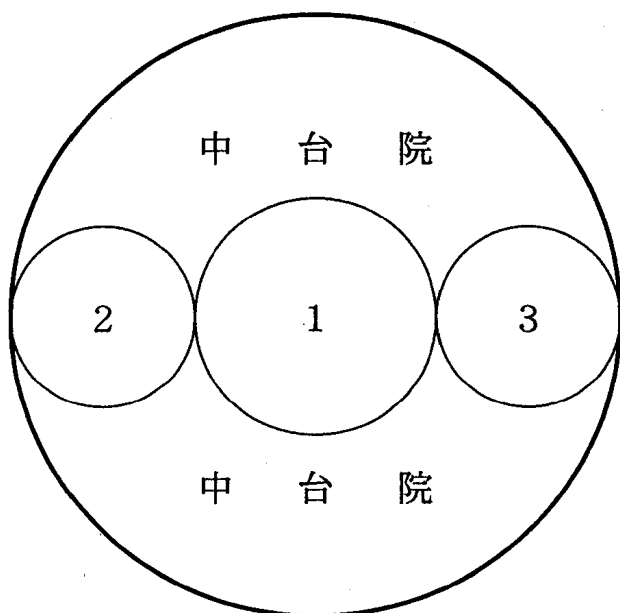
カスパーが幼子イエス・キリストに捧げた没薬は、ドイツ語ではミュレ (Myrrhe)、その複数形がミュレン (Myrrhen) である。ミュレンはアラビア原産で、胃腸薬、防腐剤として用いられていたものである。味はにがい。この没薬ミュレンはイエス・キリストの死の際にも捧げられている。

さて、昼の12時に、全地は暗くなり、それが3時まで続いた。3時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは「わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。そこに居合せた人々のうちには、これを聞いて「この人はエリヤを呼んでいる」という者もいた。そのうちの1人が、すぐに走り寄り、海綿を取って酸いぶどう酒を含ませ、葦の棒に付けて、イエスに飲ませようとした。ほかの人々は、「待て、エリヤが彼を救いに来るかどうか、見ていよう」と言った。しかし、イエスは再び大声で叫び、息を引き取られた。⁽³⁰⁾

「酸いぶどう酒」は、没薬を混ぜ合せたぶどう酒とされている。すなわち、ジム (本名ミュレン) は、イエス・キリストの生と死の際に捧げられた者なのである。ここで、本稿の136ページを思い出していただきたい。ジムは「知恵の人」と定義されていた。要するにジム (本名ミュレン) は、カスパーの敬虔と愛と知性の側面を体現した者である。胎蔵マンダラの流儀で言えば、ジムは中台八葉院の中の大日如来の一切智智の当体である受用法身の四如来に相当する尊格である。従ってジムは中台院の中に受用法身として配置されなければならない。

ルーカスは新約聖書の「ルカによる福音書」のルカのドイツ語名である。ここでまた本稿の136ページを思い出していただきたい。ルーカスは「行動の人」と定義されていたのである。要するにルーカスは、カスパーの敬虔と愛と行動の側面を体現した者である。胎蔵マンダラの中台八葉院の中の四菩薩に相当する尊格である。従って、ルーカスも中台院の中に配置されなければならない。

第3図 中台院



中台院

- ① 自性法身 聖三王カスパー
- ② 受用法身 ジム(ミュレン王)
- ③ 受用法身 ルーカス

これを総合して図で描けば第3図になる。これが「ジム・クノップと荒くれ13」マンダラの中台院である。

なお念のために、「ジム・クノップと荒くれ13」の第1章で登場する他の人物について、マンダラ図との関係の可能性を検討しておかなくてはなるまい。

まず、アルフォンス12時15分前王。彼は、ルマー・新ルマ連合王国の国王である。彼はこのマンダラ図の中台院とおおいに関係がある。しかし、聖三王カスパーに代って本尊の座を占めるべき人物ではない。あるいは、ジムやルーカスに代ることのできる能力の持ち主でもない。かと言って、独立した尊格を形成する個性と力量のある人物でもない。この王の本質は「12時15分前」にあるのだ。この人物については、本稿の最後の方で改めて言及する方がいいであろう。

次にリ・シ姫。彼女は、終始この物語の進展に係りを持つ重要人物である。結局は、ジムの妻、すなわちミュレン王の妃となる。従って彼女は、後期タントリズムのマンダラ図の中でよく登場している明妃の座を占める人物、つまりミュレン王（異名ジム）と同体となるべき人物で、独立の座を形成すべき人物ではない。

次にヴァース婦人。この人の対人関係についての規定はどこにもない。まるで実の母のように、ジムやリ・シ姫の身の回りの世話をかいがいしくしてくれるやさしい婦人である。ルーカスの妻であろうと推定してさしつかえはない。けれども、そうであるという明確な文言はどこにもない。それにしても明らか

にルーカスの明妃的な人物である。

最後にエルメル氏。彼は物知り自慢の人。その知識で他の人々の役に立ちたがってはいるけれども、彼の出る幕はない。この物語は、彼の存在なしで進展して行く。ただし、最後になって彼にも名誉が与えられる。かれは本願を成就したジム、すなわちミュレン王の読み書きの先生として採用される。しかし、マンダラ図の中の1尊格を形成できるような個性と力を備えている人物ではない。この物語に登場する人物で、本来からジムの陣営に属している眷族はこれですべてである。従って、「ジム・クノップと荒くれ13」マンダラの中台院は、第3図のようにしか描きようがないのである。

2-2 初重

本尊が確定すれば、そのマンダラ全体の性格はそれによって決定される。「ジム・クノップと荒くれ13」マンダラは、カスパーの本誓成就図なのである。そして、中台院の構造が確定すれば、それに応じて初重の構造と第二重の構造もおのずと決まる。聖三王カスパーの本質は、知恵と行動に2極化されて定義され、知恵の当体はジムによって開示され、行動の当体はルーカスによって開示されたのである。カスパー即ジムであり、カスパー即ルーカスなのである。そしてジムとルーカスの合体によって、智恵と行動の人である本来の聖三王カスパーが再現されることになる。知恵と行動への2極分化と統合の最初の展開、これが初重である。そしてこの初重の完結が、聖三王カスパーの本誓成就へ向かう第一歩となる。

初重も第二重も、トゥア・トゥア氏を迎えに行くあの冒険旅行の中で、いわば副産物として達成される。それ故、話をふり出しにもどして、海越え、山越え、砂漠越えの、あの冒険旅行を始めからたどってみななければならない。

ルーカスの親蒸気機関車エマに帆を張り、ジムの子供蒸気機関車モリーを曳航して、ルマー国の国民全員の涙涙の見送りを背に受けて、ジムとルーカスは見かけ巨人トゥア・トゥアさんを探し出してルマー国へ連れて帰る目的の大冒険旅行の旅路につく。出航したその日の夕方、大海原に没み行く入日に見とれているとき、早速、珍妙な客の訪問を受ける。それは人魚姫ズアズルピッチの来訪であった。彼女は、陽気でほがらかで人なつこく、ジムとルーカスにペチャクチャ話しかけてくる。彼女は、海底の国の国王ロールモラルの娘だという。海底の国では1年程前から照明装置が故障していて、おおいに困っているという。できればジムとルーカスにその故障を直してはもらえないか、というロールモラ

ル王お出ましの上での直々のお願いなのである。話によれば、海底の国の照明装置の電気は、「異邦海」⁽³¹⁾の島にある大きな磁石から来ているらしい。そこがこわれているらしいのである。とりあえずジムとルーカスは、その磁石を調べて見ることにし、ズアズルピッチ姫の案内で「異邦海」へ向う。その途上でもズアズルピッチ姫の口はふさがることはない。いろいろなことを打ち明ける。この時の彼女の打ち明け話は、マンガラ図の第二重を描く際には必要不可欠な情報となる。それ故、その話の紹介や引用は後でその際することとし、ここでは旅路を急がなければならない。

やがて3人は「異邦海」へ入って行く。夜空は急に荒れ模様になり、闇夜の黒い海面は更に不気味さを増す。程なく3人は目的地の磁鉄岩の島にたどりつく。それは、海面からいきなりそそり立つ2つの険しい小島であった。2度、3度その島のまわりを回り、ようやく上陸できそうな所を見つけ、島にあがる。機関車船のエマとモリーを陸に引き揚げ、早速その磁鉄岩の島の調査に出かける。そしてとうとう、磁鉄岩の中をくりぬいて島の地底へ降りて行く縦穴の入口を発見する。その縦穴の入口には、何か書いてある。鏝をこすり落すと文字が浮び上ってきた。

警 告

注意！ 注意！

グルムシュ大磁鉄！⁽³²⁾

という書き出しで、この穴を降りる者はあらゆる鉄の金具を身体からはなしてから行くよう警告してあるのである。ジムとルーカスはその縦穴を降りて行く。深い。もう既に海底の地面よりもかなり深く降りたであろうと思われる所でようやく縦穴は行きづまり、そこはかなり広いホールになっている。そこは、地球の中心核を形成しているマグマに近いらしく、ジムとルーカスでさえ長い間は居れないくらい暑い。まるで無数の大小の横穴のある丸天井の鍾乳洞みたいだ。トンネルのように太い横穴があって、その横穴を進んで行くとやがてまたもや今来た鍾乳洞のホールとよく似た所に出る。そこはどうやら隣りの磁鉄岩の小島にある縦穴の底らしい。注目すべきは、その両方のホールからその横穴の地面をはって互に他方のホールの方へ延びて行く太い根のような形の鉄の丸太棒である。不思議なことに、この鉄の丸太棒は、ホールとホールの間あたりの所で、まるで風呂桶を切り出したかのような具合に地面ごとえぐり取られ、切断されていたのである。その切り口の両面に何か文字らしきものが書いてある。鏝をこすり落しても、所々しか判読できず意味をなさない。その所々

しか判読できない文字をルーカスが拾い読みする。それをヒントにして遂にジムが全文を復元したのである。

その一方の切断面には、

これは初代の海王グルムシュの秘密の知恵である

この知恵を理解する者は賢明である

この知恵を用いる者は強大である

もう一方の切断面には、

昼と夜からなる力は深く秘められて眠っている

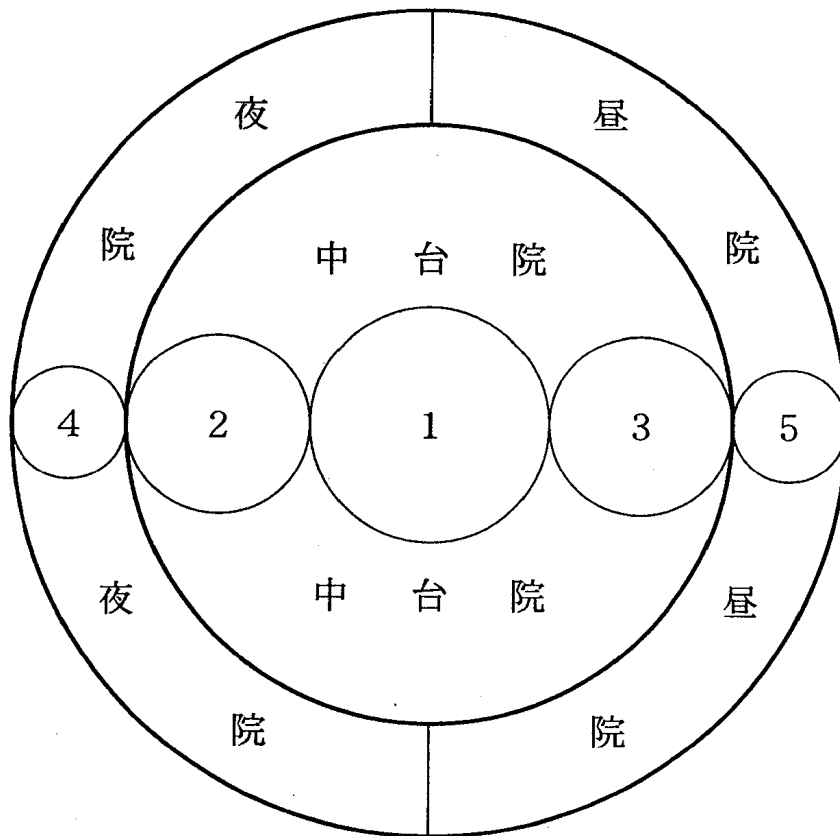
このことここに切り離されて眠り続けている

つなげ——力は覚めん⁽³³⁾

と書いてあったのである。つまり、海面に険しくそそり立っていた二つの磁鉄岩の島は、地底深くのこの横穴を走っている鉄の丸太棒でつながっていて、巨大な馬蹄形の磁石を形成していたのである。そしてここが、この磁石のスイッチだったのである。しかし、その接続素子が見当たらない。何者かが取り外して、それをどこかに隠したのだ。ジムとルーカスは、大小の横穴が迷路のように走っているその鍾乳洞の中を必死になって探し回る。持ってきたローソクもそろそろ燃えつきる頃だ。ジムが何かにつまずいてころぶ。それは2メートルもある綿棒のような形をしていて、水のように透き通るガラスで出来ている。その中心に1本の鉄の棒が端から端まで通っている物だった。これだ！ ジムとルーカスは力を合せ、二、三步運んでは休み、また二、三步運んでは休み、あの切断されている所へ運ぼうとする。もう数歩の所まで来た時、ついにローソクの火は燃えつきて、あたりは真っ暗闇。ジムとルーカスは手さぐりでその接続子をその切断箇所にはめこむ。とたんに、回りは言葉で言い表せないような美しい光にあふれる。「夜」と「昼」に分断されて眠っていた偉大な力を、今や再結合・再統合することによって覚めさせることに成功したのである。エンデがここで言っている「夜と昼からなる力」とは、我々の言葉で言えば「プラスとマイナスから成る力」、あるいは「陰と陽からなる力」ということであり、森羅万象の変化の原動力としての根源的な力と考えてさしつかえなからう。

ここまで読み進んでくれば、マンダラ図の初重を描くための情報は十分得られたことになる。中台院において、本尊である聖三王カスパーの本質は「知恵」と「行動」に2極化された。そのカスパーの「知恵」は、ジムを經由して、ここ初重に於ては「夜」に変身したのである。他方、本尊カスパーの「行動」は、ルーカスを經由して、ここ初重に於ては「昼」に変身したのである。

第4図 初重



中台院

- ①自性法身 聖三王カスパー
- ②受用法身 ジム(ミュレン王)
- ③受用法身 ルーカス

初重：夜院と昼院

- ④変化法身 ナハト
- ⑤変化法身 ターク

これを胎蔵マンダラ流に言えば、自性法身聖三王カスパーの「知恵」を引き継ぐ変化法身は、「夜」であり、自性法身カスパーの「行動」を引き継ぐ変化法身は「昼」であるということになる。「夜」を主尊とする院を筆者は、夜院と名づけ、「昼」を主尊とする院を昼院と名づけることにする。このマンダラ図の初重は、中台院の構成に対応してこの二つの院によって構成され、完成される。

「夜」と「昼」を結合したということは、この新たに開かれた初重の世界においてジムの「知恵」とルーカスの「行動」を結合させたということであり、それはまた同時に、知恵と行動を具備している聖三王カスパーを本来の姿で復元して、ここ初重の新しく開かれた世界に登場させたということになるのである。つまり、自性法身カスパーは、「夜」と「昼」に変化して、すなわち方便を

究竟して、本誓を成就するために、外金剛部院へ向って1段階外の世界へ遷移したということなのである。これを図示すれば第4図になる。法身（尊格）としての名称は、「夜」はドイツ語の音を取って「ナハト」と名づけ、「昼」は「ターク」と名づけることにする。

2-3 第二重

話を再び「ジム・クノップと荒くれ13」にもどそう。

こうしてジムとルーカスは、海底の国に電力を供給する大磁鉄の破損箇所を修理することに成功した。ジムは好奇心から、夜側の磁鉄岩を1塊と昼側の磁鉄岩を1塊を拾って持ち帰ることにする。さっき降りて来た縦穴を登って地上に出て、ズアズルピッチ姫の待っている海岸に戻ると、今夜予定されている初代海王グルムシュを讃える大照明祭に故障の修理が間に合って、彼女は大喜びである。しかし、ジムとルーカスは、これによって非常に困る事態に陥ったのである。大磁石のマイナス側とプラス側を接続したため、大磁力がよみがえって、鉄でできている蒸気機関車のエマもモリーも、磁鉄岩からできている岩壁に引きつけられて、押せど引けどビクとも動かない。このままでは、この島から脱出できない。それで、あの地底深くの横穴にある「夜」と「昼」の接続素子を必要に応じてはめたりはずしたりする役の人がどうしても必要だということに気づく。とりあえず明朝までは、あの接続素子をはめたままにしておくけれども、あすになれば取りはずして出航するというので、ズアズルピッチ姫も同意する。彼女は、早急に接続素子のはめはずしの役をする人を探すと言う。しかし、地底深くのあそこで、地球の中心核のマグマに近い猛烈に暑いあそこで、恒常的に居続けてこの役割を確実に果たすことは、「水性」の生き物である海底の王国の人々にはできない。彼らとは異種の、しかも彼らに誠実に協力してくれる「火性」の生き物を探し出さなければならないのである。これは水性の彼女たちにとっては極めて困難なことなのである。

海の照明の故障を修理するということは、海の住人たちの切実な問題として浮上してきた事で、ジムとルーカスから見れば、旅の途上知り合った人から頼まれた事で、いわば他人事で、どうでもいい事、少なくとも重要な問題ではない事のようにしか思われていないのである。実際、ジムとルーカスが心にかけている事は、早くトゥア・トゥアさんを探し出して、早く彼をルマー国へ連れ帰らなくては、ということだけである。しかし、海の照明の故障を修理するという事、すなわち「夜」と「昼」を接続するという事、更には確実に恒常

的に接続したままの状態を保持するという事は、正に袖ふりあうも多生の縁、海の住人にとって必要である以上に、ジムとルーカスにとってはむしろ生死にかかわる程、重大で宿命的な大問題なのである。前節を思い出して欲しい。「夜」と「昼」を切り離れたままにしておいては、マンダラの初重界は成立しない。聖三王カスパーは初重界へ遷移できないのである。ということは、ジムもルーカスも初重界へ進出することはできず、永遠に中台院の中にとどまり続け、聖三王カスパーの本誓は永遠に成就されないということになるのである。

話を「ジム・クノップと荒くれ13」にもどそう。翌日、「夜」と「昼」の接続素子を取り外してから、早速出航の準備にとりかかる。ジムが前日地下の接続箇所近くから持ってきた2個の磁鉄岩の塊をあれこれ調べているうちに、偶然その2個の塊に同時にハンマーで接触してしまったのである。さあ、大変。囲りにある鉄の金具という金具が全部それに引き寄せられてしまったのである。子供機関車モリーでさえも、その磁力に引き寄せられ崖をつたってころがりながら引き寄せられてきた程、強い磁力が発生したのである。この偶然の出来事をヒントに、この2個の磁鉄岩を動力源として利用して、親機関車エマを「永久機関」⁽³⁴⁾に改造する。エマは、海面を猛スピードでスイスイ進むことができるようになったのみならず、空高く上昇して飛行することさえできるようになったのである。しかし、子供機関車モリーを曳行して行くことは困難になったため、この磁鉄岩の小島の上の窪地に入れて固定し、残して行くことにしたのである。帰り道、再びここに寄って連れ帰るつもりで。こうして、ジムとルーカスは空飛ぶエマ号に乗って無事この磁鉄岩の小島を脱出して、一足飛びに「異邦海」も渡り切って大陸にたどりつき、早速「世界の冠」山脈越にとりかかるのだけれども、マンダラ図の二重の構造を解明するためには、話を少々前にもどして、ジムとルーカスがズアズルピッチ姫の案内で磁鉄岩の小島へと急ぐ場面にもどらなければならない。

ズアズルピッチ姫はとめどなくおしゃべりを続ける。彼女の話は、彼女と彼女のいいなづけウシャオリシュウムの上に及ぶ。彼は背に甲羅をもっている水の性の男性だという。彼女の父ロールモラル王は、彼に結婚を許す条件として、彼に「永遠の水晶」を製造せよと命令した。ウシャオリシュウムはこの試練を克服するために、もう400年も前に旅に出たまま何の音信もないと言い、よよと泣き崩れる。「永遠の水晶」を製造する知識を持っている人は、いつの時代にも世界で1人しか居ない。その人はその知識を死ぬ間際に1人の弟子に口伝で伝授するのだという。そして彼女のいいなづけウシャオリシュウムは、既

にその知識を伝授してもらって知っていると言うのだ。

「じゃあ万事最高に申し分なしというところじゃないか。」ルーカスは大声で言った。

「ええ」人魚姫はため息をついた。「その秘密を知るだけでいいのなら万事オッケーなんだけど。その秘密を知っている人は、私たちの国にはいつも居たわ。でもここ10万年来、「永遠の水晶」が製造されたことは1度もなかったの。それはこういうわけなのよ、水の性の人だけではこの水晶は作れないの、もう1人の他の人の協力がなければ作れないの。その他の人というのは、火の性の人でなければならぬの。私たちが火の性の人と仲よしだった時代もあったのよ、でもそれはずーっとずーっと昔のことなの。水の性の人々の国と火の性の人々の国の間で戦争が起きたのがいつだったか、もう誰にも正確には思い出せないわ。とにかく今は私たちは敵どうしなの。それからというもの、永遠の水晶が作られたことは1度もないのです。」

「ああそれで、ウシャオリシュウムは仲よくしてくれそうな火の性の人を探しているというわけなのだね。」ルーカスがもの思いにふけてつぶやいた。

「ええ、」ズアズルピッチ姫はうなづいた。

「もう400年も前から探し続けてきたのよ、そしてこの先もきっと1万年も。強固なそして昔からの敵対関係を克服するのは、それはもう本当にむずかしいことですもの。」⁽³⁵⁾

こんな話をしているうちに3人は、本稿で既に詳しくとり上げたあの磁鉄岩の2柱の小島に到着し、その地底で眠る「夜の力」と「昼の力」の話へと移って行くのだけれども、上に引用したズアズルピッチ姫のうち明け話は、マンダラ図の第2重を形成するための必要不可欠な情報なのである。要点を次の3点にしぼって明確にしておこう。海底の「水の性の人」たちの王国には、師資相承の秘伝である「永遠の水晶」を作る知識がある。この知識を持っているのはいつの時代にもたった1人である。今この知識を持っているのは彼女のいいなづけのウシャオリシュウムである。これが第1点。次に、しかし、単にその知識を持っているだけでは「永遠の水晶」は作ることができない。「水の性の人」と「火の性の人」が共に協力し合わなければ「永遠の水晶」は作れない。この点が第2点。ウシャオリシュウムは今、「永遠の水晶」を作るために、彼に協力してくれる「火の性の人」を探している最中である。この点が第3点。以上の3点である。この第3点、すなわち「水の性の人」であるウシャオリシュウム

に協力してくれる「火の性の人」を探し出すという課題は、実は前節の中で語られた「夜」と「昼」の接続素子のはめはずしの役をしてくれる人を探し出すという課題と完全に一致している課題なのである。しかし当面は、このことはジムにもルーカスにも認識されないまま、トゥア・トゥアさんへの旅は続く。

磁石を利用した永久機関を装備したエマは、2人を乗せて一足飛びに海を越え、その日の夕刻早くも大陸にたどりつく。海岸からいきなり「世界の冠」山脈が連なっている。勢いに乗って、休まずその山越えにとりかかる。ところが、越えても越えても更に高い次の山なみが眼前に立ちはだかる。第3番目の一番高い山なみを越える時はもう夜、あやうく激突しそうになる。おまけに酸欠で気絶寸前、命からがら山越えに成功する。次の朝早く、いよいよ「世界の涯」砂漠に入って、トゥア・トゥアさんを探し回る。「世界の涯」砂漠の上空を何回もジグザグに飛び回り、ようやく意外にもオアシスもない、ヤシの木もはえていない、勿論家もない正に砂漠の真中におびえて震えながらうずくまっているトゥア・トゥアさんを発見する。事情を聞くと、彼は今まで見たこともない怪物にオアシスのほとりの家を占領され、ほうほうのていでここへ逃げて来たのだと言う。こわがる彼をなぐさめながらオアシスのそばの彼の家へ行って、窓から家の中を伺ってみると、ソファの下からはみ出ている何者かの尻尾が見える。ジムとルーカスが家の中へ入って、力を合わせてその尻尾を引きずり出して見ると、これまた意外や意外、友人の半竜ネーポムクが姿を現したのだ。ネーポムクというのはクマー国の外輪山の「千火山の国」⁽³⁶⁾に住む半竜で、以前ジムとルーカスがクマー国へ侵入して、その国の主で竜のマールツァーンを打ちまかし、彼に囚われていた世界中のいろいろな国々の子供たちをクマー国から救い出した時、クマー国へ侵入する手引きをしてくれた協力者だったのである。しかし、トゥア・トゥアさんとネーポムクは、互いに相手を知らなかったため、互いに相手に恐れをなして、見かけ巨人トゥア・トゥアさんは家を捨てて砂漠の中へ、半竜ネーポムクは、ソファの下へ逃げ込んで2人とも恐怖で震えあがっていたというわけである。

話を聞いている内に互いの恐怖心も消えて、皆仲間になる。朝食を終えて一息ついたところで、ジムとルーカスは、トゥア・トゥアさんに今回の訪問の目的を告げる。トゥア・トゥアさんはとびあがって喜んで、ルマーへ行って灯台の役につくことを承諾する。その話を側で聞いていたネーポムクは、是非自分をもルマー国へ一緒に連れて行ってくれと、泣いて頼む。故郷へ帰れば捕えられて殺されてしまうので、もう帰る所がないという。わけを聞いてみるとこう

だ。竜の国では、マールツァーンと捕えていた子供たちが姿を消した後、きびしい追及の調査が行われ、ついに変装した機関車のエマをつきとめた。そしてそれを手引きをしたネーポムクに調査の手が伸び、彼を逮捕するため42匹の竜の警察隊が迫ってきた。それをいち早く感知したネーポムクは、ほうほうのていで逃げ出し、命からがら「世界の涯」砂漠にたどりついたところで、トゥア・トゥアさんとぼったり出くわしたというわけである。

「でも心配はいらないよ。ネーポムク。君は僕たちを助けてくれたんだ。今度は僕たちが君を助けてやるよ。きっと何か思いつくさ。」ルーカスはパイプを口唇からはずして、目を細め、調べるような目つきでその半竜を見つめた。

「もう思いついている事があるんだがね。」思案顔で彼は言った。「ただ問題なのは、ネーポムクがあんな責任重大な仕事に向くかどうかだ。」

「あの事？」ジムが声をひそめて言った。

「彼がああ磁鉄岩の岩礁で……？」⁽³⁷⁾

ネーポムクを、「夜」と「昼」の接続素子のはめはずし役につけては、という事に思いついたのだけれども、ジムもルーカスもすぐには決断が出来ない。ネーポムクは、もう竜がやるような悪いことはしない、ジムやルーカスにふさわしい者になるよう一生懸命やると誓いを立てて、その役をやらせてくれと頼む。

「よしわかった。」ルーカスが言った。「君にやらせてみることにしよう。でも問題は君の食料だ。何か食べる物がなくてはなるまい。」

「それはもう絶対そうだよ！」ネーポムクはキーキー声で言った。「でもあなた方は言っていたよ、そこにはすぐ下にドロドロに溶けた地球の内部があるから、とっても暑いんだって。そんなら僕は両端にバケツを結び付けたつるべ井戸を掘るよ。そうすれば欲しいだけたくさん溶岩が手に入るよ、それにそれ以上栄養のある食物は他にないよ。」⁽³⁸⁾

ということで、万事うまく行って、ジムとルーカスは、トゥア・トゥアさんとネーポムクを連れて帰途につく。残してきた子供機関車モリーを迎えに行くためもあって、まず再び「異邦海」の磁鉄岩の小島へ向かう。

小島に着くと、ズアズルピッチ姫とウシャオリシュウムが彼らを出迎える。ロールラル王から出されていた課題が解けたかとたずねると、まだ解けていない、彼ら「水の性」の人を敵視しない「火の性」の人は見つからなかったと言う。ネーポムクが姿を現すと、ズアズルピッチ姫もウシャオリシュウムをネーポムクの姿言動に恐れをなして海の底へもぐってしまう。ようやく遠くの海面

に2人が顔を出す。

「安心してもっとこっちへおいで。」ルーカスが大声で叫んだ。「こわがらなくていいんだよ。ほんとうだよ。」

「絶対だいじょうぶだよ。」ジムも受け合った。「ネーポムクはとてもおとなしい火の性の人なんだよ。彼は君たちと仲良くしたいって言っているんだよ。」

「仲良くしたいんだ。」ネーポムクも出来る限りやさしいつくり声で言った。

「僕はおとなしい火の性の人なんだ。本当だよ。」

「火の性の人?」、急に興味を持って、甲羅のある水の精がたずねた。「あなたが私たちと仲よくしたい、ですって? 本当ですか?」

「本当だとも。僕、本当に友達になりたいと思っているんだ。」ネーポムクは念をおしてまじめにうなずいてみせた⁽³⁹⁾。

こうしてルーカスは、ネーポムクをウシャオリシュウムに引き合わせ、早速3人で縦穴を降りてあの大磁石の接続素子のある地下のホールへと向かう。他方、ジムは、モリーを格納しておいたはずの窪地へ急ぐ。ところがモリーが居ない。ズアズルピッチ姫とウシャオリシュウムに協力してもらってさんざん探し回っても見つからない。そこで、エマを潜水艇に改造して海底を探索することにする。エマの炭水車の中にジム、ルーカス、トゥア・トゥアさんが乗り込み、運転手はウシャオリシュウム。ウシャオリシュウムには永久機関の操縦ができないので、それを取りはずして一群のタツノオトシゴに引かせて海底へ向かう。搜索が長びくにつれて車内の酸素が不足してくる。気づいた時は、もう手おくれ。タツノオトシゴ、ズアズルピッチ、ウシャオリシュウムの力では海岸が急峻に海に落ち込んでいる磁鉄岩の島の海岸にエマを引き揚げることはできない。ジムたち3人は命をウシャオリシュウムにまかせるしかない。他のいずこかの島へ向かう途中、酸素欠乏のため3人とも気を失ってしまう。

ジムたち3人が再び目を覚ました所は、なだらかな砂浜の波打ち際だった。しかもそこは故郷のルマー国だったのである。浅瀬にはズアズルピッチ姫が3人を見守っている。

「しかし、とても信じられないなあ。」今度は人魚姫の方に向けてルーカスは言った。

「あんなに長い間走って、あの船室の中では生きのびられっこないよ。」

「そうよ。」ズアズルピッチ姫は誇らし気に言った。「もしウシャオリシュウムが側に居てくれなかったらね。彼はたくさん秘密を知っているの、彼

は偉大なお医者さんでもあるのよ。やっここに着いて、キケンシャのドアをこじ開けてみたら、あなた方はまるで死んだみたいになっていたわ。あなた方を引きずり出して、砂の上にねかせたの。あなた方がまだかすかに生きているのを見とどけると、彼はいつも身につけている小さなびんから秘密の薬を取り出して、あなた方1人1人に飲ませてあげたの。そうしたらあなた方はまた息をし始めたのよ。」

「そのすばらしい甲羅持ちの水の精はどこに居るんだい？」ルーカスは言った。

「その命の恩人に是非お礼を言わなくっちゃ。」

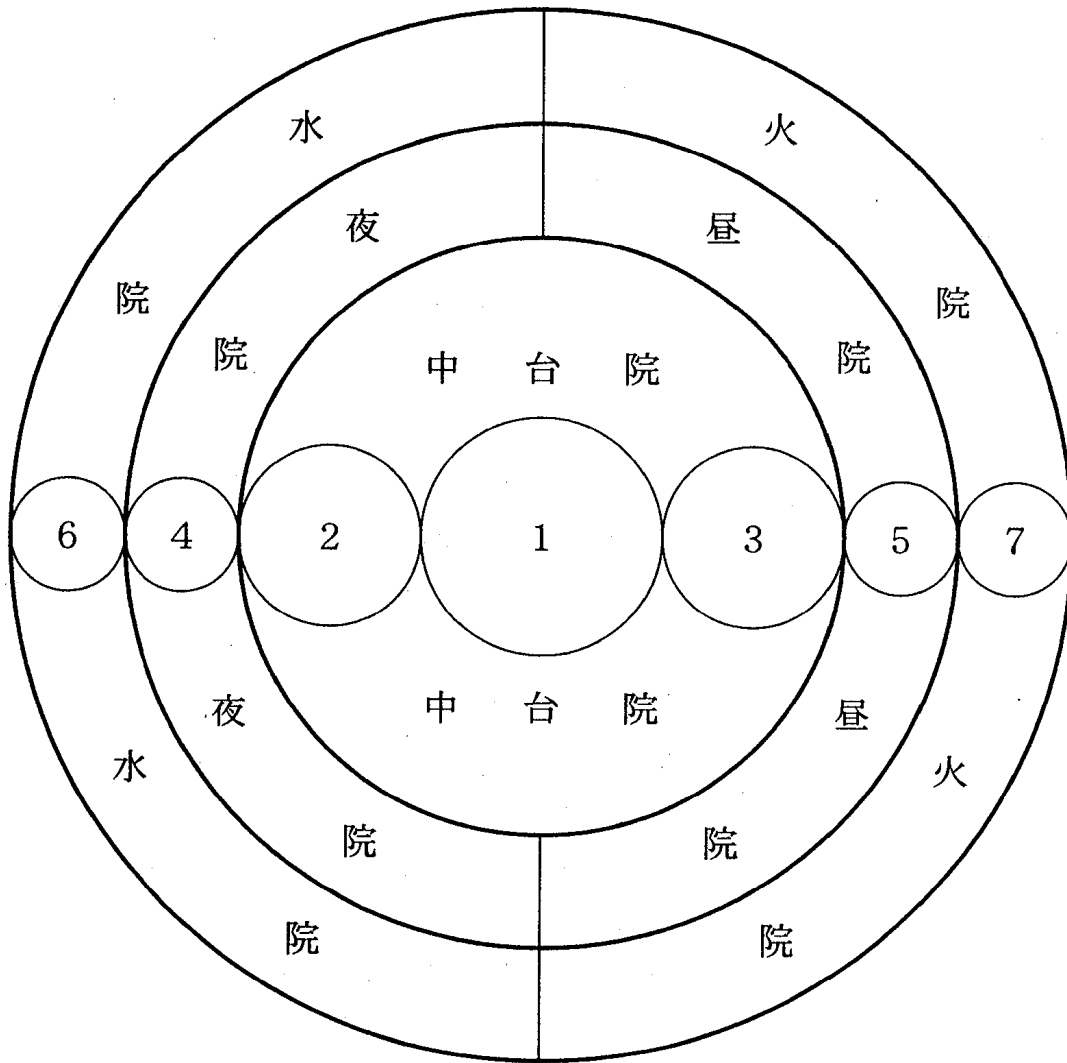
「あなた方が助かったのを見とどけると行っちゃったわ。パパから出された課題を解くために、すぐネーポムクのところへ行くんだって。あなた方によろしくって、力になっていただいて心から感謝しているって、言ってたわ。あなた方が居らっしゃらなかったら、火の性の人と仲良くなることは決してできなかつただろうって、彼言ってたわ。」⁽⁴⁰⁾

この後ルマーでは、ジムとルーカスの生還に喜び、沸きかえる。トゥア・トゥアさんが来てくれたことで、灯台問題も解決する。

ここで、マンダラ図作製にとりかかることにしよう。第二重を形成する主役はウシャオリシュウムとネーポムクである。ウシャオリシュウムは、ジムと「ナハト」によって引き継がれてきたカスパー王の「知恵」を引き継ぐ変化法身である。ネーポムクは、ルーカスと「ターク」によって引き継がれてきたカスパー王の「行動」を引き継ぐ変化法身である。ウシャオリシュウムは「水の性の人」であるから、彼の院を「水院」と名づけ、ネーポムクは「火の性の人」であるから、彼の院を「火院」と名づけることにする。水の力と火の力を合せることは、初重の夜の力と昼の力を合せることと同じで、中台院の中のジムとルーカスを合せることとも同じである。これによって本来の姿の聖三王カスパーが再現されるのである。こうして聖三王カスパーは、目的地である最外院へ向って、更に一步踏み出したことになるのである。聖三王カスパーは第二重の世界まで遷移してきたのである。これをマンダラ図化すれば第5図になる。

初重と第二重の完成によって、本尊である聖三王カスパーは眷族すべてを結集し、各々をしかるべき部署に配置したことになる。大日経の言葉を借りれば「方便を究竟」したことになる。次の仕事は、最外院を形成すること、つまり本誓を成就すること、すなわち悪趣の難敵でさえ調伏し、失われた王国ヤンバラを再発見し、キリスト教の王国を再興することである。

第5図 二重



中台院

- ①自性法身 聖三王カスパー
- ②受用法身 ジム(ミュレン王)
- ③受用法身 ルーカス

初重：夜院と昼院

- ④変化法身 ナハト
- ⑤変化法身 ターク

第二重：水院と火院

- ⑥変化法身 ウシャオリシュウム
- ⑦変化法身 ネーポムク

2-4 最外院

冒険旅行から帰還してから1週間程経った頃、マンダラ国王プング・ギングから電話がかかって来る。1年前から変身のための魔法の眠りについてた竜フラウ・マールツァーンが目覚めが間近かに迫っている。至急マンダラ国へ来られたし、という知らせである。即刻マンダラ国へかけつけると、今ちょうど竜が目覚ますところであった。全身黄金と化し、キラキラ輝いている。

ジムはルーカスの手をしっかりと握った。2人は畏敬な驚きに打たれて言葉もなく立ち尽くしていた。自分たちがこの竜を打ち負かしたからこそ、しかもこの竜を殺さなかったからこそ、この奇跡的な変身が引き起こされたという事を2人とも信じられなかった。しかしそれは疑うべくもない事実であった⁽⁴¹⁾。

いかなる難敵をも殺さない、生かしたまま心身共に、特にその心を変身せしめる、これは正にタントリズムの精神なのである。

やがて竜は両前足をふんばって上体を起す。両目を開ける。なんとその眼は燃えるようなエメラルドグリーン。その眼差しをじーっとジムとルーカスに注いでいる。息のつまるような沈黙。お寺の鐘の響きのような低い、しかしよく通るうめき声を一声、腹の底からはき出すと、ジムとルーカスに向かって話し始める。

「おいで下さったのですね。私が御主人様とお呼びするあなた様方。」

「ええ、来ました。」ルーカスが答えた。

「あなた様方がおいでになったのはよいことです。」竜は話を続けた。「なぜなら、あなた様方に課されていることを果す時が今来ているのです。謎は解かれなければなりません。」

「それであなたは知っているのですか……」ルーカスはもう少しで「フラウ・マールツァーン」と呼びかけるところだった。しかし急に、この竜にそう呼びかけることは出来ない気がして、こう尋ねた。

「知っているのですか、『知恵の黄金竜』、私たちは何をすることになっているのですか？」

「わかります。」竜は答えた⁽⁴²⁾。

マンダラ図を作製するために、あえて要点をくり返さなくてはならない。以前、この竜は、クマー国の主で、その名は「竜フラウ・マールツァーン」であった。海賊「あらくれ13」と友好関係を持っていて、彼らが世界各地からさらって来る子供たちをラム酒と交換で買い取り、幽閉しておく悪者であった。1年

程前のこと、彼はジムとルーカスによって打ち負かされ、生け捕りにされ、マングラ国につれて来られて変身のための眠りにつかされた。その眠りから目覚めた時の最初の言葉が上に引用したこの言葉だったのである。「おいで下さったのですね、私が御主人様とお呼びするあなた様方。」敵だった者が、今は部下に変身したのだ。その名も「竜フラウ・マールツァーン」から「知恵の黄金竜」に変わったのである。「知恵の黄金竜」、この名は体を表している。では「知恵の黄金竜」に変身する前の昔の正体は何か。それを知るためには、「竜フラウ・マールツァーン」を知らなければならない。それは、この物語が大団円を迎える入口の所で、「知恵の黄金竜」自身の口から告白される。

「お知りおき下さい、私の小さな御主人様。」竜は言葉を続けた。「あの黒い顔の賢王カスパーには、悪い敵がいたのです。その悪い敵とは——それは私だったのです。竜は超長生きだということは、あなた様もご存じでしょう。しかしカスパーには、私を打ち負かすことも、私を『知恵の黄金竜』に変身させることもできなかったのです。それを始めてなされたのはあなた様だったのです。ミュレン王子。」中略

「カスパー王の広大な王国は海底に沈んでいます。」竜は言った。「もう1000年以上も前から海底に沈んでいます。」

「なぜ沈んでしまったのですか？」ジムは大きく目を見ひらいて尋ねた。「この私が沈めさせたからです。当時私の敵であったあの黒い顔の王をなきものにするためにです。我々竜が支配していた火山の力によって、あの恐ろしい『あってはならない国』を海底から浮上せしめたのです。それによって、ヤンバラ国は丁度大きな天秤の他方の先端のように、海底に沈んでしまったのです。それでその国は消滅したまま、今日まで発見されなかったのです。」⁽⁴³⁾

なんと、竜フラウ・マールツァーンは、カスパー王をなき者にし、カスパー王の広大な王国を海底に沈めた強大な敵だったのである。その難敵をジムは打ち負かし、変身せしめ、部下としたのである。仏教的に言えば、悪趣の難敵を調伏したということである。キリスト教的に言えば、きわめて手ごわい異教徒を改宗させたということである。タントラ仏教の考え方では、調伏されたからといって以前に持っていた力や能力を剥奪されるわけではない。その力や能力をそのまま保持し、心を入れかえてその力や能力をつくして護法の側にまわるのである。従って、強力な力を持っていた敵であればある程、それだけ強力な護法神に生れ変わるのである。胎蔵マングラの第3重すなわち最外院（外金剛部

院とも呼ぶ)には、梵天や大自在天や帝釈天を始めとする数々の護法神が描かれている。これらはすべて元々はバラモン教の最高級の神々だったのである。梵天は宇宙創造神 Brahman、大自在天は創造、保持、破壊と救済の神 Śiva、帝釈天は雷神 Indra であった。それが調伏されて仏法の護法神となった者なのである。「知恵の黄金竜」もまた然り。最強の難敵だった者が打ち負かされて、最強の守護神として生れ変わった者である。それ故、「知恵の黄金竜」は「ジム・クノップ」と荒くれ13」マンダラの第3重、すなわち最外院の一構成員でなければならないのである。

「知恵の黄金竜」は何もかも知っている。未来のこともすべてお見通しである。正に予言神としての守護神である。この「知恵の黄金竜」はまず始めに、ジムとルーカスに「荒くれ13」の征服の仕方を教える。それが成就された後に、いよいよ海底に沈んでいるカスパー王の王国、ヤンバラの浮上のさせ方を教える運びとなる。

まずは、「荒くれ13」との決戦のいきさつから見ることにしてしよう。

どのような方法で、そしてどこで「荒くれ13」を見つけ出すことができるのかルーカスがたずねようとしたその時、竜はもう既に語り始めていた。

「一隻の船を大小さまざまな武器で装備しなさい。船板も帆も海の色と同じ青色にしなさい。見つかりにくいように船底から一番高いマストのてっぺんまで波模様を施しなさい。そうすれば見つかりにくいのです。そして風まかせ潮まかせに漂流していなさい。そうすればその船があなた様方を適切な場所へ連れて行ってくれるでしょう。このことを決して疑ってはなりません。しかし、もしも我慢しきれず、あるいは自分勝手に、1度でも舵に手を触れれば、その場所へ行くことは決してできません。(中略)

血のように赤い帆を張った船が近づいてくるのを発見することでしょう。その船は夜明けの薄明りの中を南から近づいて来ます。」

「『荒くれ13』だ!」ジムはつぶやいて、われ知らず身震いした。(中略)

「『荒くれ13』との決戦は、勿論我々が勝つんですね?」

「勝つことは勝つでしょう。」竜は更に謎めいた答をした。「しかし、戦いに於てではありません。なぜなら勝者は負け、敗者は勝つでしょうから。だからよくお聞き下さい、私の小さな御主人様。嵐の目の中であなた様は1つの星を目にするでしょう、血のように赤い五方向に尖のある星を。その星を掴み取って、あなた様御自身で主になりなさい——そうすればあなた様は、あなた様のお生れの秘密を発見するでありますよ。』⁽⁴⁴⁾

ジムとルーカスたちは「知恵の黄金竜」の言う通りに実行して、「荒くれ13」に決戦をいどむ。その決戦の結果とその後のなりゆきは既に本稿の第2章第1節、137ページから140ページで紹介した通りである。「嵐の目」城の宝物庫の中で発見した羊皮紙の文書によって、ジムがカスパー王の33代目の末裔のミュレン王子であること、そしてミュレン王子すなわちジムは失われているカスパー王の王国ヤンバラを再発見すべく運命づけられている事などを知った一同は、再び「嵐の目」城の大広間にもどり、捕らえた「荒くれ13」をどう裁くべきかの相談に入る。ここから、もう少しこまめに筋を追うことにする。

船長や水夫たちは、断固死刑に処すべきであると主張する。

「たしかにそうかもしれない。」ジムは答えた。「でも、彼らは僕を海から拾い上げて、1度は僕を救ってくれたんだし。」

「君が決めなくてはならないよ、ジム。」ルーカスは思案顔で言った。「彼らを打ち負かしたのも君なんだから。」

「僕が決めなければならないのなら」、ジムは真剣になって言った。「僕は命を助けてやることにする。」⁽⁴⁵⁾

一度征服されながら命を与えられる、これは最外院（外金剛部院）の中に座を占めている護法神すべてに共通する運命なのである。

「荒くれ13」はこの恩に報いるためにジム達全員を、この「嵐の目」城のある「あってはならない国」から脱出させて、故国へ送り届けてやると約束する。実際、「荒くれ13」の操船術によらない限り、ジムたちはたつ巻の水の壁を通りぬけて、この「あってはならない国」の外へ脱出することは出来ないのである。また、海賊たちは、「荒くれ13」の名誉をまっとうするために、自からの手で自からの命と自分たちの海賊船を葬る自由を与えてくれるよう要求する。更に、死ぬ前に彼らを裏切った竜マールツァーンと決着をつけるために、彼に1度会わせて欲しいと懇願する。結局、ジムは「荒くれ13」をマンダラ国にいる「知恵の黄金竜」の所へ案内する。しかし、「荒くれ13」は、竜マールツァーンが、今では「知恵の黄金竜」に変身をとげてしまっていることをまだ知らないため、これが彼らの探している竜であるとは見わけることが出来ず、欺かれたと勘違いして激怒し、抜刀してジムやルーカスに切りかかろうとする。その時、

「私がおまえたちが探している者だ。」神秘的な青銅の響きのような声が、『知恵の黄金竜』のお腹の底から響いた。「しかし、闇の世界で仲間であったお前たちには、もはや私がわかるまい。なぜなら私は変身してしまっているからだ。」

海賊たちは頭の中が混乱して、どうしていいかわからなかった。やっと1人が勇気を奮い起して、はき出すように言った。

「なぜおれたちをうら切りやがった？」

「うら切ったのではない。」竜は答えた。

「お前たちを長年のまちがいから目覚めさせる時が来たことを、私は知ったからだ。お前たちが自分たちをそういう者だと思っているにすぎなかった者に、いよいよ本当にそうなるようにと思って、私はそうしたのだ。今私の御主人様である王に、そしてお前たちの御主人様となるであろう王におつかえするのだ。」

「誰かに仕えるなんてことを、おれたちがするものか。」海賊たちは歯ざしりして言った。「おれたちが『荒くれ13』である限りはな。」

「お前たちは『荒くれ13』ではないのだ。」竜の声が響き渡った。海賊たちは口をあぐり開けて見つめた。

「そんならおれたちは一体誰なのだ？」海賊の1人がたずねた。

こんどは竜は、怖くて父王の手をしっかりと握りしめている小さな王女に視線を向けた。

「リ・シ姫。」竜は言った。あなたは1度クマー国に居たことがありますね。そしてその時、私の学校で算数を学びましたね。カスパー王の王笏の中に隠されていたあの古い文書の中に書いてあった通り、今度はあなたがあなたの命の恩人が曲がっていることをまっすぐにするのを手伝ってやる気はありませんか。」

「はい。」リ・シは小さな声で言った。「喜んでいたします。」

「それでは、自から『荒くれ13』と名乗っているその男たちの数を数えてごらんさい。」

小さな姫はかぞえてみた。そうすると彼女の目は驚きのあまり大きくまわなくなった。念のためもう1度かぞえた。とうとう言った。「12人しかいません。」

この言葉を聞いた海賊たちのあわてようといったら、それはもう笑い出しそうな程だった。彼らの顔はまっ青になり、急にあわれっぽく心許なさそうになった⁽⁴⁶⁾。

海賊たちは、それをにわかには信ずることができなかつた。しかし、何回かぞえてもやはり12人である。こうして、ジムによって「曲がっていることがまっすぐに」されたのである。今まで名誉の死をかけてきた「荒くれ13」とい

う根拠を失ってしまった海賊たちは急に態度を軟化させる。

「ジム・クノップフ、」海賊は目をキラキラ輝かせて言った。「お前はおれたちを打ちまかした。そしておれたちの命を助けてくれた。そしてお前は、おまえの友人と力を合わせてここに居るこの竜をも打ちまかし、やはり命を助けてやった。それでその竜は変身してお前を御主人様と呼んでいる。おれたちは前々から誓いを立てておいたのだ。おれたちが負ければ『荒くれ13』は終りにしよう。しかしおれたちは、もともと『荒くれ13』ではなかったのだ。だからいずれにせよもうおれたちは終りなのだ。だからおれはお前に聞きたい、おれたちのお頭になってはくれないか。お前は既に赤い星を身につけていることでもあるから。」⁽⁴⁷⁾

ジムは断る。そこで竜は海賊たちに、ジムの主と仰ぐためには、まず忠誠を誓った上で、自らの自由意志でつぐないの業をなしとげなければならないと助言する。海賊は全員、ジムに命をかけて忠誠をつくすと誓う。そして、言う。

「おれたちは何をしなければならないんだ？」⁽⁴⁸⁾

そこで「知恵の黄金竜」は海賊たちに告げる。そのつぐないの業というのは、海賊たちの故国「あつてはならない国」を自分たちの手で海底に沈めることによって、聖三王カスパーの失われた王国「ヤンバラ」を再浮上させることだという。そのためには、「嵐の目」城の中心にある12の扉のある部屋の12の扉を、呼吸を合せて一斉に開けなければならないのだという秘密が説き明かされる。それができるのは今では彼ら海賊だけで、彼らの他にそれが出来る者はいない、変身を遂げてしまった今となつては、それは自分にも出来ないのだと言う。

さすがの海賊たちもうなだれたまま身動きもしない。長い間沈黙したまま迷いに迷ったあげく、一晩考える時間をくれという。

かすかに夜が白みはじめ、星が輝きを失った頃、彼らの決心はもうついていた。彼らはたき火を消した。ちょうどその時、ジムとルーカスが近づいて来るのが見えた。兄弟たちの1人が2人に向かってきて言った。

「決めた。おれたちは『嵐の目』を沈める。」

ジムはルーカスの手をギュッと握って低い声で言った。「それなら僕達も君たちと一緒に行く。」

12人の兄弟は驚いてジムを見つめた。

「家へ帰るつもりじゃないのか？」1人が聞いた。

「いいや。」ジムは言った。「君たちは僕のために君たちの国を沈める。だから僕たちも君たちと一緒にその危険をわかちあうつもりなんだ。」⁽⁴⁹⁾

この「あつてはならない国」を海底に沈める作業は、「ジム・クノッフと荒くれ13」の中で最も壮大で、最も迫力のある大スペクタクルである。

「あつてはならない国」は、常に猛烈なハリケーンの中心にある巨大な竜巻の目の中にある。この竜巻の水の壁を通りぬけて目の中へ出入りすることができるのは、この海賊船だけである。その竜巻の内部は静かな巨大な円筒状の空間になっていて、そこに島がある。これが「あつてはならない国」である。その島全体に大小の空洞の管が走っていて、たとえば言えば、その島は乾いた海綿でできているような島なのである。海賊たちは竜巻のスピンを利用して船を島の陸上を滑走させ、かなり高い所にある船つき場まで船を引き揚げるのである。そこには島の内部へ入るトンネルの入口があつて、そのトンネルを進んで行くと、島の地下の中心部に至り、そこに海賊たちが酒宴を催す大ホールと、12の扉のある部屋があるのだ。そこが「嵐の目」城である。

ジムとルーカスは、船つき場で船に残っていつでも出航できる準備をととのえて、12人の帰りを待っていることにする。12人の海賊は1人1扉ずつ扉に手をかけて、呼吸を合せて渾身の力をこめて一斉に扉を開ける。あいたとたん、海水が猛烈な勢いでドツと「嵐の目」城に流れ込む。海賊たちが逃げるひまはない。空洞という空洞に海水は流れこみ、穴という穴から海水が鉄砲水となって吹き出してきて海賊たちを呑み込んでしまう。水かさが増してきて船の所に達した時、ジムは1人の海賊の腕を見つけてひつつかみ、渾身の力をこめて船の中へ引きずりあげる。海賊たちは数珠つながりになって12人全員船に引きずり込まれる。しかしもう時遅し。「あつてはならない国」から脱出することはできない。あつという間に島全体が水びたしとなり、水をたっぷりと吸った海綿のようになって、「あつてはならない国」はいよいよ沈没しはじめる。と同時に周りに円筒状にそそり立っていた巨大な竜巻が崩れ始める。空から水が崩れ落ちてくる。船は宙へ海中へ、きりもみ状態にもてあそばれる。「あつてはならない国」が海中に沈んでしまうと、今度はそこに深さが数百メートルもある巨大なすり鉢状のうず巻が生ずる。船は数百メートルも深いうず巻の底の方のほとんど垂直に近い急勾配の水壁にへばりつき、海賊たちが必死になって船首を上の方へ向けて1メートルまた1メートルと船を上の方へ操っているのを目にしたのを最後に、ジムとルーカスは気を失ってしまう。

2人が気がつくとき、海はなぎ、真っ赤な夕焼けが空をそめていた。海賊たちはズタズタに壊れた手すりのそばに並んで、ついさっきまで自分達の国があった海を見つめていた。

ジムとルーカスは彼らの方へ近づいて行った。

しばらくすると海賊の1人が言った。「おれたちは『知恵の黄金竜』が言った通りにした。おれたちは罪ほろぼしをしたぜ。でもおれたちは今どこへ行けばいいんだ、ジム・クノップ？ おれたちにはもう国はない。あんたがおれたちのおかしらになってくれねえなら、そしてあんたの王国に受け入れてくれねえなら、おれたちはこの船でこれからずーっと世界の海を一刻も休むことなくうろつき回っていなければならないことになるのだ。」

「ルマー国は、僕たち皆のためには小さすぎる。」ジムは小さな声で答えた。

「でもヤンバラがどこにあるかわかったら、皆で一緒にそこへ行こう。そしてお前たちは僕の護衛隊になって、僕の国を守護しなさい。」

「で、おれたちは何と名乗ればいいんだい？」海賊の1人が期待を込めてたずねた。

「『ミュレン王子と無敵の12人』ってのはどうだろう。」ジムが提案した。海賊たちは一瞬ポカンと口を開けてジムを見つめていた。それからとびあがって喜んだ。

「ホー、ホー」彼らは笑いながら大声で叫んだ。「こいつはいい、気に入った！『ミュレン王子と無敵の12人』バンザーイ！」⁽⁵⁰⁾

続いて、12人はジムとルーカスによって1人1人名前をつけてもらう。

1. アントニオ
2. エミリオ
3. フェルナンド
4. イグナツィオ
5. ルドヴィコ
6. マクシミリアノ
7. ニコロ
8. ルドルフォ
9. セバスチアーノ
10. テオドロ
11. ウルリコ
12. クサベリオ

この12人の大男たちはまるでクリスマスの日の子供たちのようにニコニコ顔で並んで、互に相手を区別することができる自分達の名前を手放して喜び合った。

「さあそれでは、旅はどっちへ行けばいいのかね？」ウルリコがたずねた。

「ルマー国へ行こう。」ジムが答えた。「故郷へ帰りなさい。そうすれば何もかもわかるからって、竜が言っていたから。」⁽⁵¹⁾

ルマー国に着いたはずの時、全員目を疑った。ルマー国は灯台一つさえ建てることのできない小島だったはずである。それ故、今は忠実な護衛隊となった「無敵の12人」さえを受け入れることができない程小さい島国のはずである。ところが、今彼らの目前に現れたのは大陸であった。「無敵の12人」は、自分たちは絶対に航路をまちがったのではない、と言いはる。そこで改めて望遠鏡でよく見ると、その大陸の中央部分は高くなっていて、そこには二つの頂があり、そのふもとに針の先程の城と、ヴァース婦人の小さな店と、駅とルーカスの機関車エマが見えたのである。しかもちょうどその時、見かけ巨人のトゥア・トゥアさんが家から出てきたのである。もう疑う余地はなかった。この宝石とさんごと真珠の大陸こそは、「あつてはならない国」が海底に沈んだ時、天秤の他方の先端のように海上に浮上したはずの聖三王カスパーの失われていた王国、ヤンバラだったのである。

今やいよいよ、聖三王の1人、黒い顔のカスパーの最後の末裔であるジム・クノップが、すなわち今やミュレン王子が、新たに獲得した太古の国、ヤンバラに、足を踏みおろす偉大な瞬間が来たのである。

「おれは提案するが」、ルーカスが言った。その声はおごそかに聞こえた。

「今日のこの偉大な日を記念して、この国をヤンバラと呼ぶのはよして、**ジムバラ**と呼ぶことにしようよ！」

全員それをすばらしい提案だと思った。そこでジムは宣言した。

「今日からは、この国を**ジムバラ**と呼ぶことにする。」

この言葉をもって、ジムは正当な権利のあるこの国を獲得したのである。

今こそこの国は、本当に、そして永遠に、ジムのものになったのである⁽⁵²⁾。

こうして「荒くれ13」は、ジムによって打ち負かされ、命を助けられ、忠誠を誓った上、「知恵の黄金竜」の忠告に従って自国を海底に沈める命がけの罪ほろぼしをした後、「不屈の12人」と命名され、晴れて護衛隊としてジムに受け入れられて、安住の地を得たのである。これを胎蔵マンドラの思想に照らして言えば、「不屈の12人」は正に調伏された悪趣の難敵であり、外金剛部院に配置されるべき等流法身としての護法尊である。

しかし、これで外金剛部院が完成されるわけではない。「ジム・クノップと荒くれ13」マンドラを完成するためには、この物語の最後の章を見なければな

らない。

晴れてジムバラ国の正統の王子となったジムすなわちミュレン王子は、かつて竜フラウ・マールツァーンの国クマー国から救い出してやった世界中のいろいろな国々の子供たちを、彼らの家族もろとも、ジムバラ国に招く。彼らが到着した後、ミュレン王子はいよいよ、リ・シ姫と結婚式を挙げるはこびとなる。

「無敵の12人」は大きな時計の文字盤の12個の数字のように、広場をまわるとりまいて、手に手に燃えるたい松をかざして立っていた。ジムとリ・シがやって来るのが見えると、彼らは力強い声でさげんだ。「我々の新郎新婦、バンザーイ、バンザーイ、バンザーイ！」

そして彼らは、彼らの新しい歌を声を合わせて歌った。

その合唱のあいだに、子供たちも大勢の家族の人々と一緒に、玉座のまわりに大きな輪を作って立ち、王子と姫にばんざいの歓声を送った。(中略)二人の御子が花婿・花嫁の衣装を着せてもらい終わると、マンダラ国の皇帝がその広い広場をしずしずと2人の方へあゆんで行った。彼はその腕に大きな青いビロードのクッションを捧げ持っていた。その上には、聖三王の1人カスパー王の壮厳な王冠、王笏、十字架付きの宝珠などの正統な王位の証となる品々、そしてリ・シのかわいらしいマンダラ国の王冠そしてまた、もと「荒くれ13」の五方向に尖がりのある赤い星が載せてあった。皇帝は2人の子供の間に進んで行った。ルーカスはジムの手を取り、ヴァースさんは小さな姫の手を引いて、5人は一緒に階段を登って行った。5人は玉座の前で立ちどまった。そこで皇帝は、低い、しかしその広い広場のすみずみまでよく通る声で言った。

「子どもたちよ、この王冠を受けよ。こうして、太古の新たに獲得されたジムバラ国は、今こそ再び王と王妃をいただくのである。」

皇帝は言い終わると機関士のルーカスにクッションを渡し、両手で12の尖のある王冠を持ってジムの頭にのせた。それから彼は同様に、小さなマンダラ国の王冠を両手に取って、それを彼の娘リ・シにかぶせてやった。それからジムは、皇帝の合図でルーカスが捧げ持っているクッションの上から王笏を取った。しかしジムは黄金の宝珠は若い王妃に手渡した。最後にルーカスが、赤い星を友人ジムのマントにつけてやった。それから2人の子供は、謎めいた文字の刻まれている白い玉座に並んで座った。

アルフォンス12時15分前王は、この式の間、礼儀正しくひかえ目に控えていた。なぜなら、彼はいわば外交儀礼として臨席しているだけだった

からである。しかしもう我慢がなくなくなり、かぶっていた自分の王冠をさっと取ると、それを空中高く振りながら言った。

「ミュレン王、ばんざあーい！ リ・シ王妃、ばんざあーい！ 新郎新婦、万歳！ 我々両隣国のよき友好関係を願って——ええと……」⁽⁵³⁾

こうして喜びのあまり感きわまる祝宴がくり広げられたのである。折しもまわりの海の深みからは、妙なる淡い緑色の光があふれ出し、同様に当日結婚式を終えたばかりのウシャオリシュウムとズアズルピッチもお祝いに馳せ参じる。ジムにとっては何よりも嬉しいことに、「荒くれ13」との決戦のさ中に海底へしずんでしまった機関車モリーが、しかも永遠の水晶で造り直されてウシャオリシュウムとズアズルピッチ姫夫妻に持ってきてもらったのである。「永遠の水晶」製の子供機関車モリーは、水の性のウシャオリシュウムと火の性のネーポムクの友好的協力の結果生まれた最初の成果だったのである。

マンダラ国からは、ありとあらゆる種類の植物が移植され、海底から浮上したばかりの宝石と真珠とさんごの国ジムバラ国は、たちまち緑豊かな豊穡の国と化して栄える。やがて周囲から、ありとあらゆる鳥たちが飛来して住みつき、ジムバラ国は楽園と化して、「子供と小鳥の国」⁽⁵⁴⁾と呼ばれるようになった。ここで、この物語はエンデ（終わり）となる。

こうして、カスパー王の失われた王国は、ジムすなわちミュレン王を戴き、世界中のいろいろな国々から来た子供たちとその家族の人々を迎え入れて最盛期を迎える。最盛期、それはたとえて言えば太陽が一番高い空にさしかかった時、すなわち正午の12時と言える。アルフォンス12時15分前王という一見謎めいた名称には、最盛期15分前王という意味が、すなわち最盛期を間近かにひかえた王という意味が込められていたのである。最盛期とは「子供と小鳥の国」の実現の期である。こうしてこの物語の第2章で登場したアルフォンス12時15分前王の名称の謎も、最終章に至って始めて解き明かすヒントが与えられたのである。

ここでマンダラ国作製に帰らなければならない。ミュレン王子とリ・シ姫との結婚式兼戴冠式に世界中のいろいろな国々から招待された子供たちの中には、インドの子供たちやエスキモーの子供たちもいる⁽⁵⁵⁾。かれらは以前は竜マルツァーンの国ルマー国に捕えられていた子供たちであり、ジムとルーカスによってそこから救出された子供たちであった。その後、各々の国の親元へ送りとどけられていたが、今回、ジムすなわちミュレン王子とリ・シ姫との結婚式に招待され、そのままジムバラ国に住みついた人々である。つまり、彼ら

はもともとは縁なき衆生であつたり異教の輩であつた者が、ジムとルーカスによって救済され、教化されて改宗させられた者たちなのである。胎蔵マンダラ流に言えば、ジムとルーカスによって済度され、本尊カスパーの等流法身と化した者たちである。彼らは、胎蔵マンダラの最外院の東の部分に配置されている男と女に等しい身分の者たちなのである。それ故、これらの世界中のいろいろな国々からやってきた多数の子供たちと彼らの家族の人々は、このマンダラの最外院に配置されるべき尊格なのである。彼らを最外院に配置することによって「ジム・クノップフと荒くれ13」マンダラは完結する。

胎蔵マンダラの最下院に西門があつて、その門はマンダラの外の世界に通じているように、「ジム・クノップフと荒くれ13」マンダラの最外院にも、このマンダラの外の世界に通じている門がなければならない。実際、そういう門があるからこそ世界のありとあらゆる国々から子供たちとその家族がジンバラ国へ入植して来て、ジンバラ国は繁栄し、このマンダラの中尊である聖三王カスパーの本誓が成就されるのである。

自称「荒くれ13」が、自らの手で「あつてはならない国」を海底に沈め、つぐないの業を完了した時、ジムはついに彼らを受け入れる決意を固めて、言う。

ジンバラがどこにあるかわかったら、皆で一緒にそこへ行こう。そしてお前たちは僕の警護隊になり、僕の国を守護しなさい⁽⁵⁶⁾。

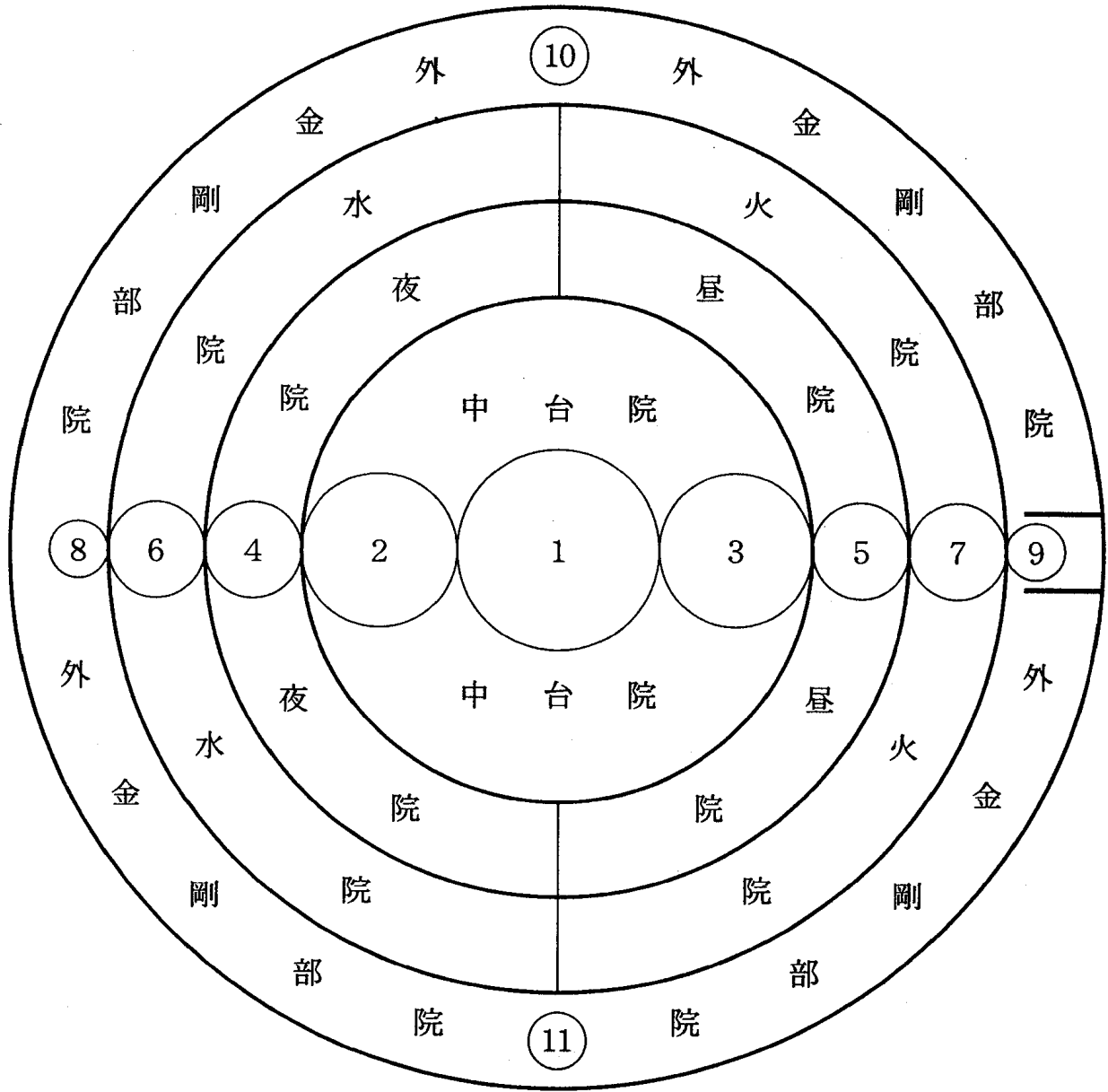
従つて、この門を警護しているのも、「不屈の12人」でなければならない。以上を総合してマンダラ図を描けば、第6図になる。

結 論

全体を通観すれば、「ジム・クノップフと荒くれ13」マンダラは、聖三王カスパーが、敬虔を因と為し、愛を根本と為し、方便を究竟と為して、一度は敵によって滅ぼされ海底に沈められた自国ヤンバラ国を、方便をつくしてジムバラ国として復活させ、自らの分身であるジム即ミュレン王に君臨させて世界中の人々を教化しつつ迎え入れ、キリスト教の壮大な楽園王国を実現するという本尊である聖三王カスパーの本誓成就に到る道筋を描いた図であると結論することができる。

なお、ここで言う方便とは知と行の結合ということである。知行合一によって目的が成就されるという思想は、エンデの「ジム・クノップフと荒くれ13」全篇を貫いている基本思想である。

第6図 「ジム・クノッフと荒くれ13」 マンダラ図



中台院

- ①自性法身 聖三王カスパー
- ②受用法身 ミュレン王 (異名ジム・クノップフ)
- ③受用法身 ルーカス

初重：夜院と昼院

- ④変化法身 ナハト
- ⑤変化法身 ターク

第2重：水院と火院

- ⑥変化法身 ウシャオリシュウム
- ⑦変化法身 ネーポムク

第3重：最外院、外金剛部院

- ⑧等流法身 知恵の黄金竜
- ⑨等流法身 無敵の12人 (アントニオ、エミリオ、フェルナンド、イグナツィオ、ルドヴィコ、マクシミリアノ、ニコロ、ルドルフォ、セバスチアーノ、テオドロ、ウルリコ、クサベリオ)
- ⑩等流法身 世界中のいろいろな国からやってきた子供たち
- ⑪等流法身 その子供たちの家族

そして、胎蔵マンダラは大日如来の果徳が衆生へ及んで行く過程を示す向下の法門を図絵化したものである。「ジム・クノッフと荒くれ13」マンダラも、聖三王カスパーの果徳が異教徒へ及んで行く過程を示す向下の展開図である。この点でも、この両者は共通点を持っているのである。

「ジム・クノッフと荒くれ13」マンダラは、当然のことながら胎蔵マンダラとは教体は異なる。けれども、このマンダラ図作製の手法は胎蔵マンダラ図絵の手法とほぼ同じなのである。この意味で第6図は、胎蔵マンダラの流儀にかなっている正統なマンダラ図であると言えるのである。

ただし、胎蔵マンダラは、釈尊の覚った法そのものを自性法身大日如来として現し、それを中尊として位置づけ、そのまわりに主要眷族全尊を配置して、本誓成就に至る過程を描いたもの、すなわち^と都会曼荼羅である。しかし、「ジム・クノッフと荒くれ13」マンダラは、キリスト教の最高の位格であるヤーヴェ、イエス・キリスト、聖霊のいずれをも中尊に置いているものではない。イエス・キリストの最初の信者聖三王カスパーを中尊に置いたマンダラ図であり、それを取り巻いている尊格も基本的にはミュレン王（異名ジム・クノッフ）とルーカス（ルカによる福音書のルカ）のみであるから、とても都会マンダラとは見なすことはできない。「ジム・クノッフと荒くれ13」マンダラは、聖三王の1人カスパー王の別徳を描いた別尊マンダラ図であると結論することができる。エンデの著書「ジム・クノッフと荒くれ13」に基づけば、これ以上複雑なマンダラ図は描くことができないのである。

注

- (1) Michael Ende: Jim Knopf und die Wilde 13 Thienemann Verlag
1990年 5ページ。

この他第1章の中には、7ページに「マンダラ茶」(Mandalatee)という語も出てくる。

- (2) *ibid.* 23ページ。
- (3) *ibid.* 28ページ。
- (4) *ibid.* 38ページ。
- (5) *ibid.* 84ページ。
- (6) *ibid.* 96ページ。
- (7) *ibid.* 126ページ。

- (8) ibid. 162 ページ。同章の中には 163 ページや 164 ページにも「マンダラ」という言葉が語られている。
- (9) ibid. 175 ページ～176 ページ。
- (10) ibid. 225 ページ。
- (11) ibid. 227 ページ。228 ページにも「マンダラの」という言葉が語られている。
- (12) ibid. 233 ページ。
- (13) ibid. 251 ページ。259 ページにも 260 ページにもマンダラという言葉が語られている。
- (14) ibid. 263 ページ。この他にも、266 ページには「小さなマンダラの冠」、270 ページと 272 ページにも「マンダラ」という言葉が語られている。
- (15) 小林良孝著「胎蔵マンダラの宇宙観」 静岡大学人文学部『人文論集』第 47 号の 2 1997 年 1 月 125 ページから 165 ページ、特に「第 2 章 胎蔵マンダラの基本的構造」(136 ページから 142 ページ) 参照。
- (16) Michael Ende: Jim Knopf und die Wilde 13 Thienemann Verlag 1990 年 6 ページ。
- (17) ibid. 8 ページ～9 ページ。
- (18) ibid. 25 ページ～26 ページ。
- (19) ibid. 99 ページ。
- (20) ibid. 97 ページ。
- (21) ibid. 29 ページ～30 ページ。
- (22) ibid. 159 ページ。
- (23) ibid. 169 ページ。
- (24) ibid. 171 ページ。
- (25) ibid. 206 ページ。
- (26) ibid. 207 ページ～208 ページ。
- (27) ibid. 218 ページ～220 ページ。
- (28) 共同訳聖書実行委員会「聖書 新共同訳」日本聖書協会 1987 年 (新) 2 ページ～3 ページ。マタイによる福音書 2¹⁻¹¹
- (29) 「大日経」の『入真言門住信品第一の七』神林隆浄著「大日経・理趣経講義」名著出版会 77 ページ。
- (30) 共同訳聖書実行委員会「聖書 新共同訳」日本聖書協会 1987 年 (新) 66 ページ～67 ページ。マタイによる福音書 27⁴⁵⁻⁵⁰
- (31) Michael Ende: Jim Knopf und die Wilde 13 Thienemann Verlag

1990年 50 ページ。

- (32) ibid. 54 ページ。
- (33) ibid. 60 ページ。
- (34) ibid. 88 ページ。
- (35) ibid. 49 ページ～50 ページ。
- (36) ibid. 120 ページ。
- (37) ibid. 120 ページ～121 ページ。
- (38) ibid. 122 ページ。
- (39) ibid. 132 ページ～133 ページ。
- (40) ibid. 154 ページ。
- (41) ibid. 169 ページ。
- (42) ibid. 169 ページ～170 ページ。
- (43) ibid. 238 ページ～239 ページ。
- (44) ibid. 170 ページ～172 ページ。
- (45) ibid. 221 ページ。
- (46) ibid. 234 ページ～236 ページ。
- (47) ibid. 238 ページ。
- (48) ibid. 239 ページ。
- (49) ibid. 242 ページ。
- (50) ibid. 248 ページ。
- (51) ibid. 250 ページ。
- (52) ibid. 255 ページ～256 ページ。
- (53) ibid. 263 ページ～266 ページ。
- (54) ibid. 272 ページ。
- (55) ibid. 271 ページ。
- (56) ibid. 246 ページ。